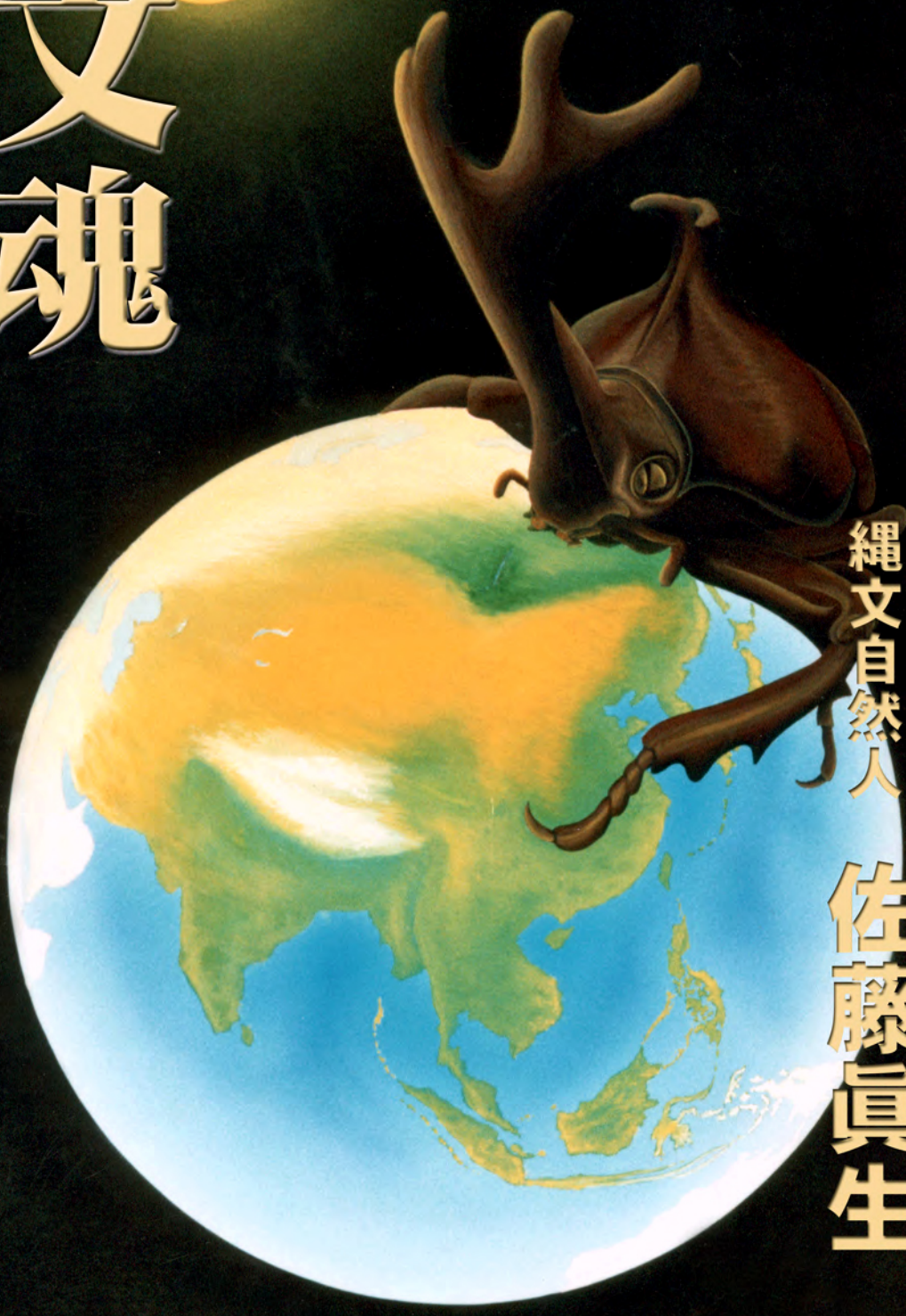
縄文魂



縄文自然人

佐藤眞生

本物を求め続ける佐藤さん

宗教社会学者
経済学者　鹿嶋　春平太

本書の著者・佐藤眞生さんは、長年にわたり経営コンサルタントとして、様々な企業を導いてこられました。多くのビジネスマンに「佐藤先生」として知られている方です。

先生は、若い頃から本業の一方で、常に本物、「まこと」の何かを求める志向を持った方でした。そういう観点から、光栄なことに私の経済・マーケティング書にも目をとめていただきました。以来、三十年にわたってお世話になってきています。

先生は、戦後日本の高成長のために働くビジネスマンを多数指導してこられました。だが、その一方で、自然の資源を加工して、人々に大量に消費させるという企業システムに、手放しで礼賛出来ない何かを感じてこられたようです。

これは、戦後日本経済を成長させたのだけれど、際限なく進めていっていいプロセスではなさそうだ。こういう問題意識が大きくなるにつれて、先生は本業に併行して「自然」というものをあらためて考え直す、という方向に研究を進められたようです。以来、「自然人」というペーパーを周期的に発信し、同志と議論を重ねてこられました。

人は、最終的には、自然に立脚しなければならない。人の身体それ自体が、「自然」の一部なのだからである。にもかかわらず、このままでは、人は知らず知らずのうちに「文明」ベースの社会を築いていってしまいそうだ……「自然人」は、この危うさを指摘し、警告を与えてきました。企業経営者にも、これに共

鳴してきた人は多いと聞いています。

その過程で、先生の関心はさらに具体化し、縄文時代の人間、その生活様式に向かっていったようです。縄文人は、自然というものにどっかりと足をつけて、生の営みをしてきていた。そこには、今の我々が学ぶべき多くのものがありそうだ……そう直感した先生は、以来、縄文ライフスタイルの研究に注力されてこられました。

本書は、これまでの研究に一区切りをつける集大成です。題して「縄文魂」。副題は「文明にすがる人間は救済する価値もない」。強烈ですね。著者の確信が、ここに凝縮している観があります。

かくいう私も、経済学・マーケティングという本業の傍ら、本物、まことの追求にも努めてきました。私の場合は、「聖書」という書物中に記されている、創造主の属性がその焦点となりました。佐藤先生の「自然」は、「聖書」では創

造主によって創られたものとなっています。その自然の中に、その一部として我々の身体はあるわけです。

両者は、そういう意味でつながっています。二つの知識は、いずれ補完的に組み合わさって、一層のお役に立つかも知れません。その期待と共に、推薦の言葉とします。

「縄文魂」出版の思い

世の中、根っこから狂っています。日本だけでなく世界中が狂っています。その原因は何でしょう？

私は、人間が自然から離れてしまったからだと思っています。人間は地球上でしか生きることが出来ません。自然界でしか生命を維持することが出来ません。それなのに自然に沿う生き方をやめて、自然を破壊する生き方をしています。

快適で効率よくやりたいことをして生きるのが幸せだと信じています。みんなの幸いはどうでもよく、自分が幸せならいいと思っています。そして、個人も、会社も、社会も、国も、お金がすべてという価値観で見事に一致しています。

その結果、人間はもう滅亡するしかないところまできています。破壊した自

然の回復はもう不可能だと思います。やっと気がついて国際会議やら条約やらで手を打とうとしていますが、それさえも利害関係の妥協でしかありません。ちょっとした延命策でしかなく、もう手遅れです。

黙して滅亡する選択もあります。しかし、自然に沿う生き方をして自給自足の生活を一万年以上続けていた縄文人がわれわれの祖先だったのです。しかも、縄文人は極めて高度な文化をもっていました。そこには霊性の高さ、聖なる魂が忍ばれます。それを解かろうとせずに滅亡するのは何としても耐えがたいのです。手遅れでもいいから、自然に沿う生き方の元に潜む縄文人の魂を尋ねてみたいのです。

日本人はその始まりの歴史である縄文を封印されています。ルーツ不明の民は迷います。魂の基層がわからないからです。縄文を解き明かせば、そこに日本人の魂の基層がある筈です。学者は物証がなければものを言いません。一万

年も前の正確な物証などある筈もありません。直観を働かせるしかありません。縄文人の魂の遺伝子に頼るのが一番です。私はそんな思いで縄文の魂を手繰ってみたいのです。

本物を求め続ける佐藤さん／鹿嶋春平太
「縄文魂」出版の思い

第一章　内なる魂を磨く……**1**

縄文に「自然」という言葉はなかった　2
縄文の自然は「もの」　4
精神的存在　7

魂　9
テレパシー　11
朝の儀式　14
土の神聖、土の母性　16
グレイトスピリット（アメリカインディアン）　19
ビジョンクェスト　22
インディアンの生き方　25
アイヌにみる縄文魂　27
縄文詩人・宮沢賢治　30
人間の使命　33

第二章　自然の摂理は循環……37
自然は至全　38
人類に普遍の自然観　40
縄文ワンワールド　43
縄文スタンダード　45
自然は他者　48
自然に間違いはない　50
生かされてある　53
自然はただ服すべきもの　55
縄文は述語・客体社会　58
未生・現世・未来　60

江戸にみる縄文　63
川がたり　65

第三章　共通点に本質がある……69
違いではなく共通点に本質がある　70
人間の内なる自然　72
縄文一万年の謎　75
縄文律　77
縄文人・親鸞　80
縄文の末裔・昌益　82
日本人の精神の母胎　85

一万年の記憶　87
アマゾンメイナク族　90
アマゾンの先住民　92
縄文に「しあわせ」はなかった　95

第四章　生き死にはひとつ……**99**

死生観　100
死は生の始まり　102
死のとらえ方　105
愛とは死に場所　107
置きかえない生き方　110

命は魂　112
人はなぜ死ぬのか　115
人はなぜ死を恐れるのか　117

第五章　慎食は最高の陰徳……121

自給自足　122
二十一世紀の自給自足　124
一万年の視点　127
命いただく食　129
慎　食　132
大らかな食　134

食べることは神殺し　137
食の摂理　139
箸から遡る縄文　142
健　康　145

第六章　時間を専有する……149
地球時間　150
固有時間　152
体時間　155
縄文人の仕事観　157

挿し絵作家の言葉／高井一暢　161

表紙画
イラスト　高井　一暢

第一章　内なる魂を磨く

縄文に「自然」という言葉はなかった

縄文人は自然に命を与えられ、自然に生かされていると考えていた。誕生も死も自然のなすがままであり、日々の生活も自然の恵みに支えられていた。

縄文人は、命と恵みをもたらすすべてのものに霊が宿ると信じていた。太陽と月、水と土と火、動物や植物や鉱物、それらはみな霊性を持ち、お互いに共存し、依存しあっていた。その関係は全く対等で主従の関係はなかった。価値に差はなかった。すべてはひとつの秩序を形成して一体だった。それらのものと、人間を分けて考える必要はなかった。だから、人間と自然を分けるための言葉も必要がなかった。

縄文人は、命と恵みをもたらすすべてのものに畏敬し祈った。なぜなら、それらのものは命と恵みではなく、時に死と不毛をももたらしたからである。火山の爆発、地震、津波、飢饉、感染症などである。命と恵みをいただくために縄文人は自らに厳しい掟を課した。すべてのものに霊性を認めた故であろう。その掟の根本は循環を止めないことだった。植物の採取では十株に二～三株の葉や茎を摘み、根は残した。薪は枯れ落ちた木を使った。狩猟では雌や子どもを避けた。狩猟採取したものは全部食べ、使いきった。縄文時代にはゴミはなかった。それでも残った貝殻などは感謝の祈りとともに手厚く礼を尽くして大地へ戻した。これが貝塚である。貝塚には時に人も葬られており、ゴミ捨て場ではなく感謝と祈りの場であった。

縄文人の理想の生き方は聖者になることだった。まず、子どもと大人を明確に分けた。大人の墓が居住区の外にあり、子どもの墓が住まいの中や近くにあるのは、子どもは人生の自立者ではないからであろう。次に、大人になるため

の試練が過酷に行われた。抜歯である。丈夫でまっとうな歯を強力で抜く、その痛さや辛さに耐えなければならない。これは厳しく自分に対峙し内面を見つめるためだと思われる。世界の先住民の中には男子の体に毒を入れ死と対峙させたり、女子に一年間たった一人の隔離生活を送らせる例もある。そして、大人と認められるためには自分の役割を決めなければならない。だから、子どもには名前をつけない。役割が決まって初めて名前がつけられた。インディアンやアボリジニの名前と同じである。「獲物を見つける男」「水を聞く女」「手を当てる男」、そんな名前がつけられた。

縄文の自然は「もの」

縄文時代に「自然」という言葉はなかった。なかったというよりは自然という言葉の存在理由がなかったというべきかもしれない。日本人が「自然」とい

う言葉を一般的に使うようになったのは明治以降で、NATURE の訳語としてだったといわれている。

自然を表す言葉が「自然」でなかったとしても、自然に対する概念はあったし、縄文以来日本人は自然を畏怖し山川草木や動物を神として崇めてきた。だから、自然を意味する言葉はあった筈だ。

縄文時代に自然を表す言葉は「もの」だったという主張がある（中西進著「日本人とは何か」）。縄文人は全体と個別を区別していなかったから、ひとつひとつは全体の一部であり、全体はひとつひとつに宿っている。ひとつひとつの中にすべての自然界が入っていると考えた。自然という抽象的な何かが別に存在するわけではなく、山や川や動植物や鉱物などの全体で自然を構成しており、自然はそれら自然を構成するひとつひとつの中にあると考えた。

例えば、個別のものを「しなもの」という。「しな」とは分類や区別、階級や階段を意味する。個別のものを意味するときわざわざ「もの」に「しな」をつけた。ということは、「もの」は元々全体を意味していたわけである。全体でありながら個別であり、個別でありながら全体であるという考え方が根底にあった。

この考え方は「一物全体」という日本人に固有の思想である。ひとつの中に全体があり、ひとつが全体を構成している。全体を全体としてみるという現代が忘れてしまった大切な視点である。

「もの」は全体を表しており、自然はまさに全体である。全体を全体としてみるから、全体のひとつひとつの構成要素の位置や個々の関係がみえる。「もの」という思想には全体を全体として理解する視点、個別の中に全体をみようという視点が含まれている。「もの」という言葉には物凄い意味の深さがある。

精神的存在

人間は物質のレベルでは個別的存在だと思う。孤立しては生きられないから万物に生かされているが、個々には主体的に生きたいと考える。生かされているという側面は公理であるが、生きるという側面は私理である。よほどの何かがなければ私理が勝る。一人一人がバラバラになる。バラバラだということは、つまり、物質的だということである。

しかし、人間は精神のレベルでは結合的存在だと思う。宇宙飛行士たちが宇宙から地球を見て感じる共通のことは「スピリチュアル・ワンネス」だという。それは人間が地球でしか生存できないということなのか？　あるいははかり知れない、とてつもない大きな意志によって結ばれているということなのか？　はたまた地球とひとつになった人間の魂ということなのか？

縄文時代には、公理が私理に勝るよほどの何かがあったものと思われる。それは自然の恵みを享受するための想像を絶する厳しい掟だったであろう。あるいは己を見つめ、役割を自覚する〈抜歯〉や〈刺青〉のような試練だったかもしれない。そしてまた、いつ訪れるか思いだに及ばない死に対する恐怖と、それを受容する祈りだったともいえる。

どう考えても縄文人には地球と共振する魂があった。人間同士もテレパシーで結ばれていた。主体的に生きたいという利己心は、己の魂を磨く生き方に全く吸収されていたのだと思う。社会的な絆が地球と一体となり、魂を高める生き方が最高とされたのだと思う。

このような生き方は、すべての存在への関心の深さとなり、それ故に己以外の存在に対して注意深い観察が向けられた。縄文の造形、土器にしても、土偶にしても、単純に見えて複雑、幼稚に見えて洗練、そして観察を極めた抽象の

素晴らしさを感じる。あるひとつのものを見ながら、実はそれが他のものとどんな関係にあるかも見極めていたのだろう。表を見ながら同時に裏をも見ていた。瞳を閉じて瞑想しながらカッと瞳を見開いていた。

日常の生活はあるがままに、足るを知り尽くした生活だったと思われる。晴耕雨読ならぬ晴労雨創のユッタリした流れに心を託していたものと思われる。

魂

「パン屋に入る。店員がいない。おいしいパンが目の前にある。思わず手が伸びる。そのとき、どこからか声がかかってくる。〈だめだ！〉その声を出す存在が魂。」「インドで数百万人の困窮者が飢え死しそうになっているニュースを、十八歳の少女が耳にする。そのとき、どこからか声がかかってくる。〈行きなさ

い〉その声を出す存在が魂。少女はやがてマザー・テレサになることでしょう。」

「おわかりのように、魂とは、神様の分身です。それをもっているものを人間といい、もっていないものをロボット、またはエコノミックアニマルといいます。」

宗左近の「縄文物語」にある一節である。

神の分身といわれる魂はすべてと連鎖している。人間同士も元々はお互いに魂で結ばれていた。縄文人は魂で共振しあっていた人々であった。

肉体は快を求める。自分をみたくないからである。しかし、心は苦を求める。自分を見るのは怖いし、苦しいけれども、そうしなければ本当の自分がわからないからである。いつまでも仮の自分でいるしかない。仮の自分でいると心が荒む。高圧的で傲慢になる。常に外を向き、外に苛立つ。進歩や充実とは無縁になる。

縄文人は、人間の肉体には二つのたましいが宿ると考えていた。心を司る「云に鬼」

というたましいと、肉体を司る「白に鬼」というたましいである。生きているときはふたつがつき、死ぬと離れる。鬼は死人を表し、云はたちのぼる気、白は青白い色を表す。人間が死ぬとふたつのたましいは青白い気となってたちのぼる。

縄文人は己に厳しく対峙し己をみつめた。己をみつめることで、役割を知り、かかわりを知り、全体を知った。役立ち合える人間は己をみつめることでしか育たない。心に苦を与え続けて初めて魂に共振できる。抜歯や指切りや入れ墨という苦痛を伴う試練も、魂との共振のためだったと考えられる。

テレパシー

縄文人の殆どは自然との一体感覚を持っていた。生命活動そのものが自然の物質・エネルギーの流れに完全に一致していた。従うべきものは自然の摂理だ

けだった。自然の摂理が身体機能になっていたのだろう。

自然そのものだった縄文人は当然のことながら、動物や植物や鉱物に感応することができた。大気・水・土の動きや流れにも感応することができた。季節の移ろいと生き物の関係、生き物同士の関係も悉くわかっていた。理論やデータや経験に頼らずに、奥底を心で感じ取る力が備わっていた。自然人としてのテレパシーを持っていた。砂漠の民といわれるアボリジニは砂漠のどこに水があるか瞬時にわかるという。

テレパシーは人間同士の間にもあった。お互いに心に感応できた。文字は必要がなかった。言葉さえもなくてよかった。メンタル・テレパシー、つまり、読心術とでもいうのだろうか。

アボリジニと生活を共にしたマルロ・モーガンが著した「ミュータント・メッセージ」に、こんな記述がある。〈毎日みんなが無言で歩くわけが、ようやくの

みこめた。この人々はメンタル・テレパシーで通じ合っているのだ。私はそれを目撃していた。なんの音もしないのに三キロも離れた人同士がメッセージを交換しているのだ。〉

アボリジニがテレパシーを活用できるのは嘘をついたことがないからだという。そしてあらゆるものに対して心を開かなければテレパシーは通じないという。すべてを受け容れ、正直になり、自分を愛することがテレパシーの条件になっている。声は話すためというよりは、歌うため、祝うため、癒しのためにある。会話は頭と心の中枢で行うものだから、言葉や文字は障害物になる。

縄文人が一万年もの間営々と培ったものは心を伝え合う、心で感応するという伝統だった。

朝の儀式

縄文人は太陽が昇ると同時に起き、太陽が沈むとともに寝た。太陽は、火と水のもとで万物の生かし主であり、原魂（もとだま）だった。朝は生であり、夜は死であった。縄文人は、毎日毎日、朝生まれ、夜死んだ。一日は生で始まり、死で終わった。

そんな毎日をおくった縄文人の、朝の儀式を推量した記述がある。

妻は夫に、「カド・アイ」と挨拶する。
一族は、父に「カド・アイ」、母に「イロ・アイ」と挨拶する。
長子は弟妹に、「ミナ・アイ」と挨拶する。
弟妹は長子に、「セナツチ・アイ」と挨拶する。

一族は揃って、太陽に向かって合掌し、「アー」といって祈る。目を開けたまま太陽をみつめて礼拝する。

幼い者から順番に、水に手を合わせて一礼し、「アア」と唱えてから口を洗う。蓮の葉やヤハギ、イタドリ、ギシギシなどで歯を磨く。

顔を洗った後、一族は揃って山へ入り、燃やし木を拾い、山菜や野草を摘む。これを朝寿（あさほぎ）といった。

朝寿（あさほぎ）をすますと、一族は揃って朝食を摂る。

縄文人の寿命は三十～三十一歳といわれ、若くして死を迎えた。現代人は十代の後半で直観像を失うというが、縄文人は死ぬまでそれを失うことはなかっ

た。それは毎日を生と死をみつめながら、それでいて大らかに生きたからなのだろう。毎日を、まっさらの命として、確かに生きる生き方が朝の儀式に凝縮されていたのだろう。

一日に三時間ほどの労働をし、あとの時間は土器の製作や儀礼や創造的な生活に使うことができた。縄文の造形はこんな生活があってはじめて理解できるように思う。

土の神聖、土の母性

縄文人は土に対する思い入れが尋常ではなかった。土は神聖で、命の源泉だった。

私は幼い頃、祖母から「水は三尺流れると真水になる」と教わった覚えがある。どういう意味かは大人になってもわからなかった。自然に対する関心が深まるにつれて、これは水の計り知れない浄化力なのだということを知った。ところがである。土には水に勝る浄化力があるという。誰かの本で、土は生きている濾過器で、病原菌や毒素を無害にするとしるされていたように思う。確かに土には昔から数え切れない動植物の死骸が埋められているのに、土が伝染病の媒介をした記録はない。土の中にはおびただしいバクテリアや単細胞動物やカビの仲間がいて、さまざまな死骸を解体し分解して神聖な元素に還元する。土は縄文人の絶大な信仰を得るほどに神聖な存在であった。

縄文人は土から命が生まれると信じていた。土中に埋めた死体から命が再生すると思っていた。縄文土器の具象文にある、蛇、サンショオウオ、トカゲ、蛙、ウサギ、コウモリ、フクロウなどはみな穴から出てくる生き物である。土の中から出てくる新しい命である。神話の中に、女神の死体からあらゆる食べ物が

生えてくる思想がある。ウケモチノカミ、ワカムスビ、オオゲツヒメなどの女神は家の中の火から生まれ、その家の中で虐殺されるが、虐殺された死体の穴から五穀や食品が生まれる。土、死体から無限に生まれる命こそ地母神信仰の原型なのだろう。

土の神聖と土からの命を考えると、縄文人の土器や土偶に対する思い入れの深さが感じられる。石器ではなくて、何故土器だったのかということである。縄文人の土に対する絶対的な信仰からすると土器でなければならなかったのである。日常の土器にも、祈りと祭祀の土器にも、至芸を施した。土偶は殆どが女性像で、しかも妊婦だった。宇宙人のような土偶はカッと見開いた目と静かに閉じた目を、まるでピカソの筆致で描いているようだが、考えようによってはこの世とあの世の一体像でもある。そして、殆どの土偶は割られているが、これが女神の虐殺、そしてその食べ物への転生へとつながっているように思う。

大人の墓でさえ、集落の近くに配置した。まして、夭折の墓は家の中だった。しかも、乳幼児をおさめた甕の底は割られていた。再生の信仰である。

グレイトスピリット

この話はアメリカインディアンのホピ族やラコタ族と共に暮らしたことのある松井誠二氏に教えていただいた。

アメリカインディアンは宇宙の意図とでもいうべきグレイトスピリットに導かれ、力を与えられて生きている。

見える世界、聞こえる世界、考える世界はほんの僅かで、人界と霊界の交通を媒介する呪師（Shaman）はこれらの世界を否定し、見えない世界を見、聞こえない世界を聞き、考えの及ばない世界を感じる仕事をする。Shaman に

は霊的に高い能力が求められる。生来の能力も必要だが、厳しいトレーニングが求められる。このトレーニングの基本がグレイトスピリットである。

アメリカインディアンにはさまざまなセレモニーがある。その目的はグレイトスピリットに沿うことであり、宇宙と地球に祈りを捧げ世界の平和を祈る。そのために自ら痛みを分かち合う。

＊　サンダンスという太陽の動きに沿って四日間断食をして踊るセレモニー。

＊　スエットロッジというテントの中で一〇〇度の焼石の熱さに耐えるセレモニー。断食をして四日間続け、最後の日には樹木にイーグルの嘴のついたロープを張り、嘴を胸に突き刺して樹木の反対方向へ走り、痛みを捧げる。

＊　ビジョンクエストというセレモニーは四日間暗闇に入る。子宮に還るセレモニーで、闇の中で見た夢を長老が物語風に解説する。グレイトスピリットの教えである。夢を見た本人はその物語を自分の人生として試す。

アメリカインディアンの人生は、東風・南風・西風・北風という四つのパターンで語られる。ビジョンクエストで見た夢はそのどれかだが、それは今より高いレベルのものであって、だからその人生に挑戦することになる。彼らは四つの人生のパターンをたどって人生を完結する。

そのような人生への挑戦を行うには満足な体が必要で、そのためには水と大地を犯してはいけない。地球は母であり、母なる地球からは何も取ってはいけない。マザーアースから何かを取れば必ず災いがもたらされる。

三万年前からの言い伝えだという。アメリカインディアンの魂が縄文人の魂の遺伝子に正確に伝承されている。

ビジョンクエスト

平原インディアンに古くから伝わる成人の儀式でビジョンクエストというのがある。少年は一人前になるために必ずこれを通過しなければならない。

ビジョンクエストでは、少年は一人で荒野に出て行く。地図も、食料も、水も、何も持っていってはいけない。何日も荒野で一人で過ごし、自然と対話しながら、聖なる力との出会いを求めてさまよい歩く。

直感的にいいと思う場所を見つけて、そこにメディスン・ホイールと呼ばれる石を円になるように置く。少年はその中に座って、心を静め、自然からのメッセージが聞こえてくるのを待つ。

夜になって、少年は不安や孤独、空腹や恐怖に襲われながら、自分の体を自然と同化させようと必死に努力する。こうして飲まず、食わずで荒野に座りつづけていると、少年は自分の力の限界を思い知らされ、やがて夢や妄想や幻覚を見るようになる。それは、鷹になって空を飛ぶ夢であったり、岩や草木が語りかけてくる妄想であったり、狼が現れて自分と対話する幻覚であったりする。その夢や妄想や幻覚を通じて、少年は神秘的なビジョン、自然の摂理や聖なる力を感じとる。それができてはじめて少年は大人になる。

真夜中に荒野でたった一人でいる恐ろしさは想像を絶するという。だから、恐怖にいたたまれなくなって逃げ帰る少年もいる。逃げ帰った少年は部族の長老に諭される。

「ビジョンは慌てて手に入るものでもなく、捕まえるものでもない。荒野を旅することによって養われた知恵と、孤独に耐えたことによって培われた忍耐力

に対して、大いなる自然の神秘が与えてくれるものだ。」

少年は荒野で見た夢や妄想や幻覚に現れた動物が自分の守護霊になると信じていた。その狼の牙や鷹の爪をアクセサリーとして身につけると、守護霊が身を守ってくれると信じていた。彼らにとってアクセサリーは、過酷な自然に同化して聞いた精霊の声が宿るものだった。それは自分を守るだけでなく、自らを高めるお守りだった。

（以上については塩浦信太郎著「インディアンの知恵」光文社に詳しい）

インディアンの生き方

インディアンの人々は赤ん坊が生まれると五日目に川につれていき水浴びをさせる。そうすると赤ん坊は川を感じられるようになり、外なる世界のほかに内なる世界があることを知る。そしてやがて内なる世界を大きくするようになる。内なる命は外なる命よりも強い。目に映る名誉とか財産というものは変わるが、内なるものは変わらない。

人々は内なる世界で生かされている。外なる世界では人々は存在するだけでそこでの生き方に価値はない。外なる世界に自然はない。自然は内なる世界にしかない。それ故観察しなければわからない。その観察が愛を育む。知識は輪の半分で、もう半分の輪はすべてのものへの愛である。愛があってはじめて真ん丸い円になる。

インディアンは自然を観察し自然から学ぶ。自然と接することで知らないうちに多くのことを学ぶ。自然の神秘を感じることで自然や創造物への畏敬の念をもつようになる。自然を観察することが内なる世界を大きくし、内なる命を強くする。

インディアンの人生の目標は、内なる世界を大きくし、内なる命を強くすることである。別の言い方をすると、インディアンは聖人になることを人生の最高の目標としている。聖人は、「他のために生きていない存在はひとつとしていない」ことを知っている。そしてそういう生き方に徹するのが聖人である。

インディアンの人生で大切なことはバランスである。そのバランスを象徴するのが川である。川は流れている。人間も流れていなければならない。体を動かしていなければならない。悩んでいる人をよく観ると動いていない。動いていないのに疲れている。

インディアンの生き方は、自然が内なる世界にあり、愛が自然の観察によってはじまり、その愛がすべてのものへの愛であり、だから他のために生きることが自然に生かされている人間の本当の姿になる。これは縄文人の生き方とまったく同じだと感じる。インディアンは現代の縄文人なのだと思う。

アイヌにみる縄文魂

アイヌはこの世に、神と人間と人間が作ったモノという三種類の存在があると考える。三者は育みあい、一体化しており、人間は神とモノとのかかわりあいの中で役割を持つ。先ず人間としての役割を果たさなければならない。一人一人の生き方はその次の問題とされる。

神とは人間が素手で立ち向かえない相手であり、火、風、雨、雷、雪は神である。大型動物、マムシのような毒を持つ動物、蜘蛛のような特殊な能力をもつ動物も神である。巨木やトリカブトも神である。人間が作ったモノでも家は神とされる。死人や魂も神である。

神には、人間にとって身近な神とそうでない神がある。しかし、神に上下のランクはない。人間にも上下のランクはない。仲良くし、手をつなぎ、それぞれの能力を発揮するような場所を作ることが神にも人間にも必要だと考える。

神には人間を守る義務があり、その義務に対して人間からお礼を受ける権利がある。人間には神に守ってもらう権利とお礼をする義務がある。肝心なのは神と人間が仲良く、深いつきあいをすることである。そうすれば人間も磐石だし、神も磐石になる。

アイヌの人々は昔から自分を軸にせず、多くの他者の中に自分を置く。多くの人たちの助けを借りて今の自分があると考える。そして腹八分の考えをする。地位や名誉や名声は自分から望んで得られるものではなく、多くの人々に支えられて現われると考える。

系図を大事にし、それぞれの家系で祖先神が決まっている。祖先神を表す印として、男は家紋と神紋、女は下紐を持ち、結婚に際しては男女とも五代前まで直系を遡り、同じ名前がでてこないことを確認する。

アイヌはいつも人の一生は何のためにあるかという問いに対する答えを頭においている。それは辛いことや苦しいことを乗り越えるためである。災難や困難は試練、試練によって人は成長する。アイヌは聖人を生涯の目標にしている。

（参照：藤村久和著「アイヌ、神々と生きる人々」小学館）

縄文詩人・宮沢賢治

宮沢賢治は縄文人だと思う。その詩作に縄文魂があますところなく詠われている。縄文の普通の人々がこの詩の魂の持ち主だったと思う。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ……食と運動とストレス耐性が均衡していた！
慾ハナク……近親相姦と殺し合いが自己制御されていた！
決シテ怒ラズ
イツモシヅカニワラッテイル

一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ……自分の前にみんながあった！
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニイテ
東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイイトイヒ

北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ……しあわせよりも、さいわいだった！
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ……自然に沿うことを生き方にした！
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ……これぞ聖人の道だった！
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

人間の使命

現代の問題の根本は人間がいつも自然の外にいることにある。自然の中から人間だけを切り抜いて、残りは自然環境だから人間とは違うということになっている。わざわざ自然に環境をつけて、人間と自然を切り離す。その結果、元々一体である自然と人間の間に次のような乖離（かいり）が生まれる。

本当は自然に生かされているのに、自分の力で生きていると思う。

自然の恵みで命をつないでいるのに、何でも開発し生産できると思う。

自然に対して人間には共通の責務があるのに、個々人がやりたいことをするのがいい生き方だと思う。

だから、現代が推奨する人間の行動規範は次のようになる。

「好きなこと」「楽なこと」「効率のいいこと」「快適なこと」をして幸せになりなさい。嫌いなこと、苦しいこと、手間・暇・辛抱がいること、煩わしいこ

とはしなくともいい。

人間は自分の力で生きることができ、必要なものは何でも開発する技術があり、一人一人が自分の幸せを追求する生き方が理想になっている。うまくいっても「ありがたい」とか「おかげさまで」とは思わない。

本当にこれでいいのか？　いい筈がない。

私は人間には少なくとも三つの使命があると思う。それを今でも持ち続けているのが先住民であり、かつて持っていたのが縄文人だったと思う。

第一　ここ地球という自然でしか生きることのできない人間、生存基盤である自然を未来世代に引き継ぐ使命。人間が生きていける状態を保たなければならない。

第二　死生観を未来世代に伝える使命。人生の終始を受けとめる受け皿である試練の、その意味と形を伝えること。誕生、成人、結婚、死という冠婚葬祭の儀礼は実は日常的に死と直面することで心に平安をもたらす社会

の仕組なのである。

第三　自分がしたいことを誰かに役立てる使命。自分がしたいことをするだけでは人間は半分しか使命を果たせない。自分がしたいと思うことはその人がもって生まれた役割、その役割を誰かに役立ててはじめて、それがその人の固有の役割となる。

世界の先住民が、そして縄文人が、何故死を伴うような試練を子供から大人への過渡期に求めたか？　その解は人間の使命の自覚にある。

第二章　自然の摂理は循環

自然は至全

自然には自ずから成る大きさがある。今様にいえば質量一定の法則ということか、あるいは適正規模ということか？　いずれにしてもすべてに分相応がある。違ったものが均衡し安定する割合がある。違うからこそ均衡が必要なのだ。この全体の中での均衡を縄文人は知り尽くしていた。吾唯足るを知るなのだろうか？

どんなに些細なことをするにも最初に最後を考える。閃いたことや直観したことでもすぐにはしない。最後がどうなるかをまず考える。例えば、「風が吹いたら桶屋が儲かる」という話があるが、この思考方法は展開するほどいろんな要素を考え、最終的に全体に及ぶ。至全である。全体に至るのである。縄文人

は自然とは至全だということ、全体でひとつだということを普通の人々が日常的に実践していた。

これらの元にあったのがすべてのものの役立ち合いという関係認識である。役立ち合いの中で生かされているから、まず全体とその均衡を考えて行動しなければ、生かされないことになると覚悟していた。縄文人は「生きている」とは考えなかった。「生かされている」と考えた。自然を構成するいろんなものに支えられて生かされていることを実感していたからである。

ある放浪の陶芸家に聞いた話がある。〈器をつくる時、土と水と火と風はひとつになる。一手ひとつである。いい器は、土や火をみていると惑わされてつくれない。音を聞けるようになると、音には本音がでるから、つくれるようになる。話しかけてくる器がいい器、自分の思いが感応する器がいい器である。音にこめられた全体感がわかるまでに長い長い時間がかかった。〉

役立ち合いが自覚できるということは、自分を律する基準が自然とか、宇宙にあるということである。自然律、宇宙律である。縄文時代には自分を中心にする自分律はなかった。少なくとも弥生時代まではまだ自然律があったのではないかと思う。これがなくなり、自分律中心になるのはお金が価値観の中心になってからであろう。

人類に普遍の自然観

人間の体は何千年何万年という時間を経て生まれ育った大地に適応する。衣食住という生命を維持するための適応も同じである。食だけをとっても、森林地帯では植物が、草原地帯では動物が、河川や海岸地帯では魚介類が、それぞれ中心になる。そしてそれに応じて、例えば、腸の長さが決まる。縄文人のように植物食が中心なら腸は長くなる。消化が早く、腸内腐食も遅いからである。

アメリカインデアンのように動物食が中心なら腸は短くなる。消化が遅く、腸内腐食が早いからである。

私は自然採取の時代には、適応した大地の違いから食性に違いはあっても世界中が共通の自然観をもっていたと思う。間違いなく人類に普遍の自然観があった。なぜなら、その時代の人間は一致して自然に完璧な畏敬の念を持っていたからである。自然の前で人間はまことにちっぽけな存在だったし、自然の変化には無力だった。氷河の移動や火山の爆発、台風や洪水や津波に対して全くなすすべがなかった。乾季や雨季、豊作や凶作、大漁や不漁、なにもかもが自然のなすがままだった。自然はただただ畏敬すべきものだった。

自然を畏れ敬う心が人間の心のありようを決めた。自然は全てを与えもしたが、すべてを奪いもした。恵みをいただくために、自然に逆らわず、自然に沿い随う生き方をした。自然の律に心の律を合わせた。だから、掟を課し祈った。

洋の東西を問わず、自然に沿う生き方は同じだった。植物でも、動物でも、魚介類でも、掟の基本は獲り尽くさないことにおかれていた。それを絶やすような行為を厳罰に処した。獲ったものは食べきりつかいきった。そしてその生命を大地に再生を祈って還した。

確かにこのような自然観が地球規模で一致してあった。縄文人も、アメリカインデアンも、アボリジニも、マオリも、この自然観を持っていた。だから、人類に普遍の自然観は回復すべきものだと思う。取り戻すべきものだと思う。人間が自然とのつながりを感じ直すことができれば人類に普遍の自然観の回復はできる。人間がその内なる自然を感じとり、その自然の声を聴くことができれば人類に普遍の自然観を取り戻すことは可能である。それをどのようにして可能にするのか？　縄文人なら我々にどう提言するだろうか？　それは、もしかすると〈宇宙から地球を見よ〉ということかもしれない。

縄文ワンワールド

太古の時代全地球は共通のひとつの自然観を持っていたように思う。縄文時代の頃、全地球はワンワールドだった。国や民族が異なる自然観を持つようになったのはかなり後になってからだと思う。その縄文ワンワールドの自然観がどのようなものだったのか、それを考えてみたい。

人間を含むすべての生命は自然から与えられたものであり、自然によって奪われるものであった。自然はただただ服すべきものであった。人は自然の循環に完璧に組み込まれる存在だった。

人知を超えた、はかり知れないものが「神」とされた。神は所によって宇宙

といわれ、自然といわれ、天地や大地といわれた。

「神」に対する祈りや祭りがあった。それは恩恵への感謝であり、脅威の回避であり、脅威を罰と受けとめたときの謝罪だった。

生と死を一体と考えていた。死後の蘇り、輪廻転生、魂の着替え、死は第二生第三生への出発などとされていた。

世界の大半は見えないものであり、その見えないものが見えているものを決めていると考えられた。人の心や無意識も見えないものであり、人の一生は見えないものを追い求める旅であった。

地球上のすべてのもの、有機物も無機物も、すべては一体であり、つながっていると思っていた。

自然循環に従う生き方が人の心を鍛えると考えた。その根本は欲望にブレーキをかけることだった。だから、子供が大人の世界に入れるのは自然循環に従う生き方を体得したときであった。大人になるための試練の殆どすべてが自然に畏怖を感じ、自然の恐怖に耐え、与えられたものに満足するという内容のものだった。そしてそれを人生の究極の目標として語るとき、「聖人になることである」という人々さえいた。

縄文スタンダード

縄文時代は違いではなく、共通点を元にして成り立っていた。そして、この縄文のありようは世界的にも普遍だった。世界と日本の歴史は古代に遡るほど類似性・普遍性に満ちているという指摘さえある（中西進「古代日本人の宇宙観」）。

古代にあったと思われる世界に共通・普遍の宇宙観を拾ってみよう。

地球の中心に世界樹があり、天地を固め、太陽の通り道となり、世界樹によって神が出現し、生と知の根源だと考えられていた。

神として畏れられた自然現象の第一が雷、第二が風、そして第三は太陽だった。人は死ぬと神になると考えられていた。しかも、霊魂が生命であり、霊魂は転生し続けて永遠だと考えていた。

太陽は西方の穴に住み、朝になると東の穴から現われる。その太陽を招く祭りが火祭りだった。

天にも地にも、左右にも、アメ・アマと呼ばれる水域があった。この宇宙水の分与を受けるのが万物の生命だった。

ワシは真鳥、オオカミ（大神）は真神、ヘビは真虫、クマはカムイやベアー（神）といわれ、クジラはイサナ（勇ましい魚）、ヒキガエルのヒキは日招き（太陽を招く）とされ、日本ではその冬眠が死と再生を意味したが、カナダでは陸と水

を結ぶ霊格とされた。みな聖なる動物である。

渦巻き状のぐるぐる巻いてやまないものは永遠を意味した。蕨手文や唐草模様、蝸牛式城、セーマン、ペンタゴンなどは神々の棲家であった。

世界全体がひとつの生命の体系に組み込まれていた。萩は雁の声を聞いて咲き、稲と雷光は夫婦（稲妻）であった。霧は女の息、息が風や雲となり、風は霧を立たせる。

四十六億年の地球史、三十五億年の生物史、そして高々四〇〇万年の人類史において文明は繁栄と滅亡を繰り返してきた。滅亡の原因は自然破壊だった。この自然破壊の元は人間の考え方そのものにある。縄文スタンダードなら、生かされている自然とその摂理の枠に人間活動をおさめることができる。欲望を抑制し、個人を超える社会的規範があった。現代流に言うと、欲望つまり経済と、相対的社会規範つまり民主主義を否定しなければならない。人類の未来のひとつの可能性が縄文スタンダードに秘められているかもしれない。

自然は他者

今、「自然と人間は共生しなければならない」という主張が盛んである。私はこの主張に以前から疑問を感じている。どう考えてもシックリこない。縄文人には自然と人間の共生などという自然観はなかったのではないかと思う。

縄文人は自然の恵みを採取することで生命を紡いでいた。その自然の恵みには悉く霊が宿っていたし、恵みをいただくことは他者の生命を自分に取り入れることだった。だから、縄文人は恵みをいただくことに厳しい掟を課した。山や川や海で恵みを採取する際に、縄文人はしてはいけないことを自ら決めていた。それを破れば恵みはもたらされず、そればかりか罰が待っていた。自然は掟を守っていれば恵みを与えてくれるが、一度掟を破れば恐ろしい罰をも与え

る他者であった。他者として罰する自然が縄文人の自然観だったと思う。

弥生時代、農業の本格化によって所有に格差が生じ、支配する者と支配される者が登場したといわれている。支配する者が渡来人で、支配される者が縄文人であったとすれば、渡来人の信ずる神は土着の縄文人の神とは違っていた筈である。しかし、渡来人は同化戦略をとらずに支配下の縄文人の神をそのまま認めて残した。認めはしたが、渡来人は縄文人から祭祀権を奪った。固有の神と祭祀権は一体であり、神は否定されなくとも祭祀権がなければ、縄文人にとっては神の否定に等しかった。渡来人にもそのことはわかっていた。だから、渡来人は縄文人の神の祟りを恐れた。縄文人の神は渡来人にとっては祟る神だった。祟る神、つまり、自然はここでも他者であった。

他者としての罰する自然、祟る自然のほかに、相としての自然があるという指摘がある（高内壮介著「古代幻想と自然」）。自然をひとつの相として眺める

自然観である。例えば、井戸掘りの名人がいて、あたりの光景をながめて水の出場所をピタリとあてたりする。あるいは鉱物の探索にあたって古老が山の形相をみながら金鉱を言いあてる。これらは自然を体系的全体としてとらえるひとつの科学であるとされる。これも自然を他者として明確に観察するものである。相としての自然も人間にとっては他者である。

縄文人の自然観は他者観であったし、それは弥生時代に引き継がれ、さらに湯川秀樹の科学にまで生きている。

自然に間違いはない

自然界には間違いがない。地震も台風も洪水も、自然界では物質・エネルギーの循環という必要があって起こる。動物も植物も、すべて自然界のこの摂理に

沿っていて間違いを犯すことはない。自然界で間違いを犯すのは人間だけである。これは縄文人の常識だった。

縄文人は生かされているという自然観を持っていた。自分だけの力で生きているとは思っていなかった。何故、生かされていると考えたのだろう？

＊　自然によって生命を与えられ、死してまた自然に還ることを信じていた。だから、自然に生かされていると考えた。

＊　家族や集落、村落やもっと広い社会のつながりがあってはじめて生きることができた。だから、社会に生かされていると思った。

＊　土器や土偶は生活の道具だったけれども、縄文人はこれに心を表した。生き方の元は心にあった。生きるということは考え方で決まる。だから、心や考え方、もっと言うと文化に生かされていると考えた。

＊　自然界は物質世界だけれども、これを包含している宇宙という多次元世界がある。縄文人は宇宙に対する鋭い認識も持っていた。宇宙が自然界を左右

していると思っていた。だから、宇宙によって生かされていると考えた。

縄文人はすべてをつながりとしてとらえた。人間の間違いはつながりを忘れることから始まる。つながりを忘れると、人間は自分の力で生きていると考えるようになる。人間至上主義の登場である。

人間至上主義とは何か？仏典はこれをドン・ジン・チといい、三毒とする。ドンとは貪ること、ジンとは憤怒や憎悪のこと、そしてチとは嫉妬や無際限の強欲だという。人間は欲望を無限に追及すると、必然的に嫉妬と憎悪が膨張する存在らしい。

自然界に間違いがないのは、ドンもジンもチもないからである。だから、善悪も、損得もない。物質・エネルギーは常に一定で、よどみなく循環している。局地的に洪水や旱魃があっても全体は均衡している。安定している。だから、

この循環の中にいる限り、間違うことはない。

生かされてある

縄文人は「生かされてある」という自然観をもっていた。「生きている」とは誰も思わなかった。自然に、万物に、生かされているから、今ここにあると思っていた。自然に対する凄まじいほどの畏怖と、自然の恵みに対する震えるような感謝と満身の祈りに、「生かされてある」という思いが滲んでいる。

縄文人は生かされている万物に深い関心を払った。人間がその万物の中で何の役に立てばいいか知っていた。そしてその最も大切なことが循環の維持だった。めぐりめぐって元へもどる螺旋の中にい続けることだけが、人間の役割だと感じていた。これはまさに直観による理解だった。縄文時代は自然の営みの

循環を断つことが即座に命を失うほど人間は自然の営みに依拠していた。

「生かされてある」直観は何に由来するのか？　それは恐らく人間の胎児の発育ではなかったかと思われる。胎児の十月十日の発育期間が、単細胞動物からサルに至る十億年の歴史を再現している。

女性が排卵する卵子は単細胞そのものであり、生命の源としての十億年前の姿である。

卵子が精子と結合して受精卵になると、多細胞動物への歩みがはじまり、これは七億年前の姿である。

受胎二ヶ月後の胎児には脊椎があり、ヒレのような四肢があり、長い尾があり、エラがあり、羊水という水の中に住み、四億年前の魚類の姿を示す。

受胎三〜四ヶ月後、エラがなくなり酸素を利用するための肺臓ができ、四肢は指になり、尾は短くなる。魚類から両生類への進化の姿である。

受胎後五ヶ月、指に爪が生え、全身に産毛が生え、爬虫類から原始哺乳類へ

と進化する。

受胎七ヶ月後、剛毛が生え、眼は側方から前面に移動し、哺乳類の中で霊長類としての特徴を持つに至る。

誕生する新生児は把握反射、モロー反射、原始歩行などまさに霊長類である。生後六～七ヶ月の新生児がはいまわり、つかまり立ちし、やがて直立二足歩行に至る過程は類人猿から直立猿人を経て原人へと飛躍する過程と一致する。

言葉を話し、外界の情報を吸収し、大脳皮質が著しい発達を遂げる一～三才に至る過程は動物としてのヒトから文化をもつ人間への進化の過程である。

自然はただ服すべきもの

縄文人は自分自身の体に自然を感じ、自然にただただ服する生き方に徹していた。自然に沿い、自然の維持を掟としていた。元通りにする、元のまま保ち

続ける、ありのままを支える生き方である。それは自然がみんなひとつにつながっていることを知っていたからである。

例えば、森と川と海を考えてみよう。山の広葉樹林で、ミツバチが蜜を集めると、花が受粉して実をつける。その実を小鳥や昆虫が食べる。小鳥や昆虫を追って大きな動物が集まる。

広葉樹の落ち葉は微生物の力によって腐葉土になる。その養分が川に流れ、海で植物プランクトンを育てる。植物プランクトンをカキが食べ、ミジンコのような動物プランクトンが食べる。動物プランクトンを追って小魚が、小魚を追って大きな魚が集まる。みんな無駄なくつながっている。何かひとつ、広葉樹が、ミツバチが欠けただけで、命の鎖は切れてしまう。

人間もこの命のつながりの中にいる。ひとつのつながりの中で生かされている。自然の循環こそ服すべき摂理だった。循環を維持することが人間の生かさ

れる条件だった。

この事実を痛いほど知り尽くしていた縄文人は、何かをするときいつも全体のことを考えた。ある行為がどこに行き着くかを思った。最後を推し量った。恐らく現代人をはるかに凌ぐ想像力があったと思われる。

そして、いつもつながりが切れないか、循環が維持されるかどうかを吟味した。ものごとの本質が循環にあることをよく知っていたからである。

その上、先の先のことを考えた。十年先、百年先、千年先のことを思った。アメリカ・インデアンは「七代先を考えて今を生きる」という。まさにそういう生き方をした。

全体観をもち、循環がわかり、未来を思えば、「してはいけないこと」「しなければならないこと」がみえてくる。そこからもたらされる緊張感が脳を活性し、知恵を育んだのだろう。そして、それ故にこそ掟が生まれ、祈りと祭祀が

生活の中心要素として定着したのだろう。縄文人は自然を畏怖しただけではなく、それを乗り越える優れた知恵を発揮したと思えてならない。

縄文は述語・客体社会

主語・主体の究極は、唯一絶対神に至る。「世界は唯一絶対の創造主がつくった」ということになり、創造主以外はすべて分離される。現代はこの分離の時代である。呉善花はこれを頭の上に広がる普遍性と言っている（「縄文思想が世界を変える」・麗澤大学出版会）。

逆に、述語・客体の究極は、あるがままの自然にいきつく。世界はそれ自体で生成したのであり、自ずから成ったのである。自然な調整作用が働き、主体の影を薄め、多元的な人間関係を横に広げる。そしてすべては融合される。全

体世界が形成され、共同体が生まれる。縄文時代の共同体はこのような本質をもっていたと思われる。これはいわば足元から横へ広がる普遍性といえる。

縄文人は自然と人間を同一視した。山川草木のすべてに神の存在を感じ、一体となって生きた。人間は自然の一部であり、木も動物も等しい存在だと感じていた。自然界のあらゆる存在に霊があり、森羅万象はその霊力によってもたらされると考えていた。

自然をあるがまま受け容れ、自分の中で調和させた。これが共同体の原初だった。縄文人はこの共同体に帰属し、自分の存在の根拠をおいた。

縄文人の共同体の特性はアジアや西欧におけるアイデンティティと比較すると一層よくわかる。

中国人や韓国人のアイデンティティは血縁社会にある。最近、孔子の七十八

代という人物に会ったが、この人は「曲阜孔氏世譜」なる家系図ならぬ立派な家系を網羅した本を持っていた。一冊三〇〇頁はある本が全十巻もあるという。血縁の凄味を感じる。

かたや西欧人のアイデンティティはというと、これは明らかに個人主義的な主体である。まさに分離を感じる。

現代の日本人のアイデンティティは何だろうか？血縁ではない。かといって個人主義的主体でもない。どこかに融和的共同体というアイデンティティが残っているような気もするが、どこか中途半端である。始まりを封印されている民族の悲哀を感じる。

未生・現世・未来

生まれる前のこと＝「未生」と、生きている今＝「現世」と、死んでから後のこと＝「未来」について、縄文人はすべてがつながった一連のものとしてとらえていた。

未生と未来は非物質世界のことであるが、現世は明らかに肉体という存在が前提であり物質世界である。

自然観というのは現世の物質原理を指し、非物質世界の未生や未来は宇宙観を指すのであろうが、縄文人にはこの区別が鮮明だった。

縄文人の宇宙観は魂の存在を信じることだった。魂は宇宙にある祖先の歴史の総体とでも言うべきものだった。それ故、魂は不滅で永遠だった。一方、心は個人の肉体に帰属する意識や意思であり、肉体とともにあり肉体とともに滅ぶ。魂は肉体を借りて存在するが、肉体が滅ぶと宇宙へ去り次なる肉体に宿る。

自然観は肉体を典型とする物質法則である。縄文人はおおむね次のように考えていた。

個は全体の一部であり、全体は個に宿っている。すべての物質は均衡している。個はあらゆる物質に生かされているが、主体的に生きようとする。生かされて生きるには欲望を抑制しなければならない。

あらゆる物質はよどみなく循環している。循環を止めない生き方が理想とされた。

縄文人は宇宙観と自然観を生きる拠り所としていた。

それはアイヌの「聖人を人生の目標とする生き方」に受け継がれている。

また、北米インディアンの「七代先を考えて今を生きる」という生き方に継承されている。

あるいは韓国の人々の「過去を生きる」という生き方もこの流れの中にある。

魂を直観できるように心を鍛え、祖先の歴史の総体に組み込まれるように魂

を磨くことが縄文人の生き方であったが、これは同時に人類に共通の生き方でもあった。

江戸にみる縄文

江戸時代は縄文時代の知恵で運営されていた。なぜなら、江戸時代は自然に同化することを生き方の基本としていたからである。

三千万人といわれた人口の八割以上が農林業につき、中級以下の武士でさえ自給自足の畑を持っていた。自然の力に頼るしかない農林業、その農林業に大半を依存していた商工業者の商品、この構図は圧倒的多数の人々が植物栽培の専門家であることを意味していた。

燃料源は樹木であったが、江戸時代に燃料が枯渇することはなかった。それは伸びる枝を使っていたからである。再生の範囲でまかなわれていた。江戸時代初期に行なわれた新田などの開発についても、一六六六年、徳川幕府は開発を停止する「山川掟」を出している。

江戸時代は製紙大国だったが、現代のように伐採樹木のパルプではなく、和紙の原料である楮（こうぞ）の一年生の枝から繊維を精製していた。だから原料は毎年再生された。和紙は植物繊維だけで出来ているので二百年は持つし、繊維が長く丈夫なので漉き返して三〜四回は再生できた。反故紙は紙屑買いがいて殆どを買い集めていた。

ゴミは出なかったし、出さなかった。釘や包丁などの金属、傘や提灯まで修理業者がおり、回収業者がいた。蝋燭のしずくを買う蝋燭の流れ買いもあった。かまどで炊事をしたので燃やせるものはすべて燃料になったし、その灰はカリ肥料として

灰買いが買い集めた。十七世紀の中頃、幕府は深川にゴミの埋め立て場を作ったが、その主なゴミはどぶさらいの泥や火事で出る壁土のような残土類だった。

糞尿は下肥として流通していた。下肥専門の問屋があり、相場がついた。武家屋敷の相場が高いといって農民が抗議をしたなどという史実もある。糞尿を下肥として使った歴史は四百年以上になる。農薬の歴史は高々四十年にすぎない。すべてを下水に捨てるよりも土に返して循環させる方がはるかに自然に適っている。

川がたり

野村春松著「四万十川がたり」には縄文人の自然観が凝縮されている。それをご紹介しよう。

自然から糧を得る生活がいい。自分の職業だけしかやらんようではいかん。勤めから戻ったらうちの仕事をする。自然からもらったものを丁寧に加減して食べるのが一番いい。

広葉樹をどんどん伐って針葉樹に植え替えたために山の保水力がなくなった。土を流れないように止めておく力も弱くなった。

川は曲がるからきれいになる。川が蛇行するとバラスができる。バラスはこまい石の集りだから、この中を水が通ると物凄い圧力がかかる。水がきれいになって出てくる。

水はあふれるもの。大水が出るということは自然には必要なこと。堤防が切れたらおしまいとドキドキすることはあって当たり前。技術で万全にしたから大丈夫と思うからいけない。川のそばで自然の中に暮らしているのだから「沢の水が止まったら逃げろ」というような知恵を持てばいい。

川岸見てたら漁期がわかる。自然をよく見てその声を聞く。「イタドリの花が咲くとツガニが下がる」「イタドリが咲いたら誰でもアメゴが釣れる」

川はダムや護岸工事など一度いじってこわしてしまったら取り返しがつかん。ダムや堰にはゴミがたまるし、メタンガスが発生する。ヘドロもたまる。水面にはアオコもたまる。

人間も鮎も世間にもまれるほど精神も体も丈夫になる。もまれた鮎ほどうまいように、世間にもまれた子ほど魅力のある人間になる。若いときは強い人間、優しい人間になるために世間にもまれることが必要な時期だ。

人を使うなら使われてみろ。楽は苦のため、苦は楽のため。ひとつのことを辛抱して身につけたら自信もつく。辛抱して目標を実現できることを体で覚えたら、何やっても駄目かもしれんということを考えなくなる。

地元の宝は地元を離れた人や遠くから見る人の方がよくわかる。この宝の意味を都会の人から教えてもらい、皆の財産として一緒に学ぶ集まり、僻地にある心の原点を見直す試みが「僻村熟」である。

自然に沿うて生きる。しかし、それだけではいけない。自然をよく見て研究して効率よくやる知恵のために頑張ることが大切。頑張りが当たり前のものと

思えば辛いというより楽しい。

第三章　共通点に本質がある

違いではなく共通点に本質がある

縄文時代は共通点の時代だったように思う。縄文人は共通点に本質をみた。違いは枝葉末節であり、大事なことは違いを越えた共通点にあると考えた。争いは違いから起こるが、そこに共通点をみつけることができれば治まる。

今も日本に現存するサンカの民は、争いごとがあるとすべての人が本音の考えを言う集まりを持つという。誰が、どう考えているか、すべての人が知る。多数決を取ったりはしない。統率者が結論を下すが、それにはみんなが従う。多分共通点に結論があるからだと思う。

アメリカ北西部のインディアンの酋長の会議も、これと似ている。話す酋長

は「トーキングスティック」を持ち、これを持っている間は他のどの酋長も口をはさまない。腹の中を全部言う。合議の結果は共通点に落ち着く。

例えば、洪水を防ぐ目的のダム建設で賛否対立して訴訟までいくケースはよくある。対立が長期化して、訴訟も膠着状態にあった時、一人の青年が「洪水は悪か」という問題提起をした。そして、賛否両派がこのテーマを研究することになった。両派が出した結論は「洪水は善である」だった。その結果、洪水域に人が住むのは間違っているということになり、州法で洪水域に住居を建てることが禁止され、ダム問題は一件落着した。アメリカのペンシルヴァニア州で実際にあった話である。

共通点を探す生き方は本質的な生き方である。どうして共通点が本質的かというと、すべての命はつながっているからである。すべての命は一体だからこそ、命の感性や命の想像力はひとつにまとまる。魂が共振する。人間の生き方が魂

に近づく。これを愛というのだろう。

慈しみも、憎しみも、愛である。正反対のようにみえるが、愛である。どうしてか？愛とは深い関心だからである。愛の反対語を考えればよくわかる。愛の反対は「無関心」である。二十世紀は言葉を変えて言えば「無関心の時代」だった。だから、争いの時代でもあった。命のつながりを認めない時代だった。縄文人はその愚かさを笑い、嗜めていることだろう。

人間の内なる自然

自然には魂がある。その魂があらゆる生命あるものをひとつにつないでいる。なぜそうなるか？すべての生命ある存在にも内なる自然があるからである。その魂は太古から不変である。人間以外の生命体の内なる魂は今でも太古のまま

である。しかし、人間は変わった。人間だけが内なる魂を眠らせる殻を持ってしまった。

人間の内なる魂は欲望という殻で覆われてしまった。欲望は、生命よりも大切なものがあるという錯覚を人間に植えつけた。人間は、欲望を充足し、主体的に生きることが最高の価値であると思った。欲望は個別だから、追求するほど他者への関心は邪魔になる。そして、自分と今だけに執着する。人間同士も、人間と他の生命体もバラバラになる。人間は内なる自然、内なる魂の声など聞かなくなる。その結果、自然破壊が起こり、人間そのものの破壊が始まった。人間の破壊はそれだけにとどまらず、すべての生命体の絶滅へと連鎖していく。

あらゆる生命の絶滅は回避できるのか？　それは人間が欲望という殻を破れるかどうかにかかっている。欲望の殻を破ることができれば、太古からある不変の魂に触れることができる。

縄文人は生命を最高の価値と考えたから、生命を脅かすような欲望があったとしたらそのこと自体が共同体の掟に反していた。それにもまして天変地異や感染症や飢饉などによる生命の危機は絶対だったろうから、それを直視すれば個人の欲望などは初めから問題外だった。

現代人はどうすれば欲望の殻を破れるか？　物質的な解決はないだろう。考え方、精神的な解決しかない。例えば、ここまできた文明は後戻りできない、誰にでも今できることから始めよう、環境はトレンドだから受け入れられる、という考え方で取り組むとしたら、あらゆる生命の絶滅は行くところまで行くしかないだろう。

あらゆる生命を絶対価値とする考え方に反するものをどうして排除するかという合意形成と実現のシナリオづくりこそ縄文人の教えではないかと思う。恐

らくシナリオの核は「慎食」と「自給自足」ではないかと思う。

縄文一万年の謎

縄文時代は何故一万年も続いたのか？　文字もなく、言葉も残っていない今、この謎はどう解けばいいのか？

縄文人は近親相姦をうまく避けていたように思う。集落でも村落でも外婚が原則だった。動物の狩猟や漁労が複数の集落・複数の村落で行われており、共同の施設の建設、更には交易も、考えようによっては外婚の範囲となっていた。このような知恵というか掟は、野生動物の世界に近親相姦がないのと一致している。

もうひとつ縄文人はお互いに殺し合いをしなかった。すくなくとも集団同士

が殺し合った形跡はない。これも動物の世界の原理である。稀に共食いというような現象はあっても、同種の動物同士は殺し合わない。

人間以外の動物は近親相姦と殺し合いを生まれながらに避けている。自動的な、まるで遺伝子に組み込まれたような抑制装置が働いている。人間はこれを掟や制度や知恵で避けるしかない。その証拠に世界中の民族が共通して近親相姦をタブーとし、核兵器の廃絶に同意している。

縄文人は何故動物界の原理を受容できたのか？

近親相姦と殺し合いの本質は欲望であるが、その欲望の形は所有と蓄積といえる。縄文人は自然循環の枠の中で生かされていることを生まれながらに体得していた。しかも、大人になる過程でこれを徹底して刷り込んだ。大人への試練としての抜歯や刺青、若い女子だけがあるいは男子だけが暮らしを共にした住居などは自然循環を体得させる激しい苦痛を伴う厳かな関門だった。

破れば命を奪われるほどの生存律としての掟があればこそ、近親相姦や自己破壊としての殺し合いは起こらなかった。すべてが共有されたのも、あらゆるものが平等に分けられたのも、この生存律に元がありそうだ。そして、自然破壊は縄文人にとっては自己破壊そのものとして認識された。殺し合いと自然破壊は同じように人間自身の自己破壊だったのである。どうも一万年の謎は近親相姦と殺し合いという自己破壊にありそうだ。

縄文律

縄文人には今はやりの「人と地球の共生」論などはなかった。なぜなら、人の生存にとって地球はなくてはならない絶対のものだったからである。地球からみれば人はあってもなくてもいい存在だったし、縄文人はそれを熟知してい

た。共生は元々ヤドカリとイソギンチャクのように、お互いが生存の条件になっている関係をいう。だから共生論は地球が危ないから人も危ないという。過去四十六億年の間地球は人がいなくともビクともしなかったし、将来人間が滅亡しても地球は存続する。共生論がスリカエであることはこれでよくわかる。

縄文人が共生論などという傲慢な誤りに陥ることがなかった背景には絶対の律があったように思う。これを縄文律としておこう。

その縄文律とは何だったのか？

まず、生かされているから生きるという律があった。縄文人は、生命は地球の秩序によってもたらされたものであり、個々の生命体には何か必然の役割があると信じていた。だから、その役割を知り、それを果たすように生きなければならないと考えた。

次に、生命は循環するという律があった。生命は土から生まれ土に還ると信じていた。植物や動物の生命をいただくのは彼らが神であり、神は殺しても再生するからである。神殺しは再生する故に許されたのである。しかし、殺した神はすべて食べ、使いきり、土への魂送りをしなければならない。循環律を守らなければならなかった。

更に、欲望は抑制すべきものという律があった。縄文人に恵みをもたらす神は有限だったから、それを利用し続けるためには使った分だけ地球にもどさなければならなかった。普通の人々がテレパシーを持ち、読心術を使えたから内心はいつも開放されていた。これらが欲望に対して抑制的に働いた。

そして、最も規定的な律があった。それはすべての存在の精神的一体性という律である。スピリチュアル・ワンネスである。個々の存在はそれぞれ物質としては別々だけれども、精神的には一体であると信じていた。それ故に縄文人

はすべてのもの、それが異質のものであっても素直に受け容れた。

縄文人「親鸞」

十三世紀鎌倉時代の宗教家・親鸞には縄文魂が受け継がれている。親鸞の思想は後の一向一揆の精神的な拠り所となったが、古代末期から中世にかけては農民を中心とする被支配者の精神的な支えであった。

親鸞は自然をジネンと呉音で読み、「自然の浄土」を説いた。自然の浄土は来世ではない。現世を精一杯生き抜く中で培われる理想世界である。死後に行く世界ではなく、自律的な生き方によって保証される理想の世界である。現世と浄土は現実と理想であり、現世から浄土へという一方通行ではなく双方向性を持っている。親鸞は弟子を持たず、寺を建てず、庶民に直接働きかけ、同行

者を増やそうとした。理想世界を求めるのに上下の格差は不要だったのだろう。この同朋同行こそ縄文魂そのものであろう。

親鸞はまた「自然法爾」を説いた。

ジネンとは「おのずからしからしむ」ということ。仏がおのずからそうさせてくれるということである。はからいを否定し、人知を越えた他力（仏力）に委ねるということである。他力本願である。

ホウニとはジネンを保証する法則という意味である。

だから、ジネンホウニというのは宇宙の法則にしたがって生きるということである。自然に身を任せて生きる、まさに縄文魂がそこにある。

もうひとつ親鸞が説いたことに「悪人正因」がある。悪人とは支配者たる善人に対する言葉で、被支配者をいう。農民や漁民や商人である。

悪人正因とは、支配者が被支配者と同じように往生するためには、被支配者

と同様の他力本願に徹しなければならないということである。支配者は自力で善行をしても往生できないというわけである。他力（仏力）の前に人知が及ばないという、ここにただただ自然に服する縄文の魂を垣間見る。

宇宙の法則にしたがい、自然に身を委ねて生きることこそ人の道、これが親鸞の理想であった。宗教の形をとり、民衆仏教とされる親鸞の教えは民衆の解放思想ともいわれる。しかし、その本質は自然に沿うことが人間の生き方の理想であり、原理であるという縄文の教えにある。

縄文の末裔・昌益

十八世紀に民衆の自律を説いた思想家・安藤昌益は縄文の末裔だと思う。彼は自然を漢音でシゼンと読み、時代の推移を次のように大別した。

太古の自然世……身分の差別がなくすべての人々が労働した自然の世。
法世……直接耕作から離れ人々の上に君臨する支配者が現われ、上下の秩序と不耕貪食の徒をつくりだしたために階級社会に変質したこしらえの世。
再建すべき自然世……現実の世である法世を全否定して新たに創られるべき最善の現世。自然の摂理に即した正しい世。

昌益は現実の世である法世を全否定し、自然世を再生することを説いた。再生すべき自然世とは、まず、すべての人々が労働する平等な社会である。次に、自然の生態系の循環に適う農耕を正業とする。そして、その農耕が拡張された循環性社会である。昌益は農耕労働と自然の循環を整合するものとして考えていた。農耕は自然循環を損なわずに再生性を持つ生産労働であると考えていたようである。

昌益の自然には、実在としての自然界と、自律生成する自然が含まれている。

この自律生成とは木・火・金・水などの矛盾する運動そのものを指している。そしてその矛盾する自己運動の根源にある原物質を、昌益は活真と名づけた。すべての事物は原物質である活真自身のもつ矛盾の原動力によって運動していると考えた。

再建されるべき自然世は、自然の理法に適った社会的自覚を持ち、心身ともに健康で労働に従事できる社会である。昌益は、この再生自然世を担う人々を正人と言った。正人とはいわば世直しの活動家であり、賛同者であり、そして心身の健康な人々を指しているようである。

再生循環社会を提唱した昌益が、人類の発生を穀物の精に見ていたということも面白い。彼は原始時代の人類はまず野生穀物の採集を行い、次いで穀物栽培・耕作とそれ以外の食物採取の併用へと発展したとしている。それ故に再生循環社会は農耕社会だったわけである。

（以上「安藤昌益の自然正世論」　東條栄喜著　農山漁村文化協会参照）

日本人の精神の母胎

宗左近は縄文を日本人の精神の母胎であると言い切る（「縄文物語」・新潮社）。にもかかわらず、縄文は日本の精神史に組み込まれていない。日本人は精神の母胎を封印された民族なのだ。いま、それを解きほぐすことは決定的に重要だと思う。宗左近の解明を追ってみたい。

縄文時代は宗教社会だった。アニミズムや呪術を超えて神を持っていた。それは、地域を超越して土器や土偶の形体・表情にひとつの精神共同体を思わせるような共通点があること、しかも実用品ではなく祭器であったこと、その祭りは日本全域にわたるものであったことが物語っている。

縄文の宗教は多神教だった。その神とは、火山と集落の祖先だった。

土器は噴火する火山そのものをあらわしている。縄文人は柔らかい土を火に入れてから固くすることを覚えた。火山の爆発と噴火によって多くの死者がでた。焼けて肉体が無くなる。焼けてなお無くならない肉体を神に祈った。その祈りのために火山を粘土で造形した。これが祭器としての土器だった。

土偶は祖先そのものをあらわしている。

縄文の神は万物に宿り、万物を愛する神だった。縄文人は他者を侵す必要がなかったし、死は愛の神のふところそのものに身を委ねることだった。弥生人の神は悉く愛ではなく知の神だった。知の神は支配の神である。

外来文化を日本化する力は縄文の神にある。例えば、十世紀末に天台宗が唱えた「草木国土悉皆成仏」は、無機物にも魂が宿るとする縄文の信仰が、インドや中国直輸入の前衛思想に変革を迫ったものである。

縄文魂の真髄は異質のものを、愛をもって受け容れるところにあった。なぜ、それができるかというと、縄文人はすべての存在に魂が宿ると信じていたからである。魂の共振によって違いではなく共通点を求めることができた。そしてそこには感謝と祈りがあった。土器や土偶は、火山と祖先への感謝と祈りの祭器として機能していたのであろう。

一万年の記憶

妻の記憶を移植して過去を辿る映画があった。化石や土偶から一万年前の記憶を抽出できるなら縄文人の心や魂がわかるのに……。

縄文人は普通の人々がテレパシーの能力をそなえ、霊に感応する心を持って

いた。それは今でもアイヌやアボリジニやアメリカインディアンなどの先住民に引き継がれている。稀に現代人の中にもそういう超能力者がいる。

そういう霊性の高い人々の声を聞きながら、直観に頼って縄文人の心や魂のありようを探ってみよう。

＊人間は宇宙のすべてとつながり、森羅万象といつでも交信できた。全縁の精神生活をしながら、森羅万象にも無限にも畏怖を感じていた。

＊日常とか非日常、日用品とか非日用品というような区別はなく、普通の人々が皮膚感覚を持った芸術家だった。心に形を与えたものが造形だった。生活と芸術と信仰が三位一体になっていた。

＊あらゆるものに序列や優劣はなく、すべての存在を同価値でとらえていた。異質とされることでも容易に受け容れた。そして、すべての存在は成長し進歩すると考えた。人間の心と魂も成長し進歩することを確信していた。

＊匂いや香りをきくことは祈りそのものだった。
＊食べることは他の生命力を身に移すことだった。食べ物の殻はそれ自体が墓であり、墓は祈りの場でもあった。
＊生と死は同じものの二面であり循環している。土偶は土に還る人間であり、負の人体として生と死を行き交う。死ぬことは土になることであった。
＊自然は恵みをあたえてくれる生の世界であるが、苛酷な畏怖すべき死の世界でもある。
＊永遠の生命力の象徴を、人間の髪、蛙や蛇やサンショウウオなどの両生動物、縄や紐にみた。
＊人間の生命現象は燃焼だと考えた。
＊火は万物の根源、そして火が土の化身を生む。
＊木が気を生む。
＊人間は死ぬとみんな同じ墓へ行き、土の中で魂の安息を得て、ふたたび人間界へ戻ってくる。

アマゾン「メイナク族」

一九九九年十一月二十七日、毎日テレビの特集「人間とは何だ」にアマゾン奥地の先住民メイナク族が紹介された。私はこのメイナク族に縄文人のＤＮＡを感じた。

メイナク族は、子供が生まれると母親が二年間子供と二人だけの生活に入る。隔離生活である。子供が母親を必要とする時期に、いつも母親がそばにいるという当たり前のことを仕組として確立している。これは子供の精神形成に不可欠の仕組である。

子供が三歳になると、今度は集落の子供たちが幼児を預かる。一日中子供た

ちが幼児の面倒をみる。親は我が子が夕方に無事帰ってくることを祈るだけで一切を任せている。これは子供が子供の面倒をみるという社会教育である。

女の子が初潮を迎えると、母親は娘と二ヶ月間隔離生活に入る。大人の女の生き方、集落における女の役割、家族における女の役割を教える。結婚や性に関する知識もこの時にまっとうに教える。

男の児は成人になると、父親の手によって、魚の鋭い歯で体中を引っかかれる。これは血を流し、痛みに耐える大人への試練である。

メイナク族の酋長は、「我々には幸せという言葉はない」という。それに近い言葉は「みんなが穏やかに暮らす」だという。幸せは文明人が個人について語る言葉であり、メイナク族にはみんなはあっても、個人の幸せはない。

メイナク族には「自然という言葉もない」という。自然に替わる言葉があるとすれば、「世界」という言葉である。自然という言葉は文明人が、元々ひとつのものを切り離す言葉として作った。メイナク族は自然とひとつであり、わざわざひとつのものを切り離して自然という必要はない。

縄文人の生活をメイナク族にみることができる。縄文人には「幸せ」という概念も、「自然」という概念もなかったと思うからである。

アマゾンの先住民

二〇〇〇年六月十一日の朝日新聞〈天声人語〉にアマゾンの先住民のことがしるされていた。ここにも私は縄文魂をみた。要約してご紹介しよう。

アマゾンの先住民には文字も貨幣もない。年齢を数えない。泣いたり、笑ったり、怒ったりはするが、幸せとか不幸せとか、寂しいという概念はない。いじめも、犯罪も、自殺もない。部族によっては、過去形や未来形はなく、現在形だけがある。

大人になるための試練は厳しい。少女は隔離された暗い部屋に約一年間こもる。誰とも口をきかず、ただひたすら自分と向き合う。少年は呪術師の調合した毒を飲む。肉体の限界を試し、死と向き合う。

現代人の殆どはこのアマゾンの先住民を野蛮人と思うかもしれない。しかし、これは充分に吟味がいる。

文字がないということは、文字がなくとも意志が伝えられるということである。縄文人にも文字はなかった。それ故にこそ普通の人々がメンタル・テレパシー

をそなえていた。お互いに相手の心が手にとるようにわかるから邪心のわきようがない。

貨幣がないということは自然の資源をそのまま使って生きているということである。そこには使用価値だけがある。使用し続けるためには使った資源は元へ戻す。根こそぎ取らない。だから循環し続ける。

幸せという概念は所有と貨幣が発達した時から生まれた。それまではみんなのさいわいはあったけれども、個人のしあわせはなかった。人の世のさいわいは長い時間をかけて積もり積もってできる。日本語もほんの少し前までは幸福に「サイワイ」というカナがふられていた。「サイワイ」が消えて、「シアワセ」だけを求めるからいじめや犯罪や自殺が増える。礼もすたれる。

アマゾンの先住民の究極の目的は聖人になることだという。成人は聖人への

道の必要条件なのだろう。死をさまよう試練はそのためにあるのだろう。

縄文に「しあわせ」はなかった

アマゾンのメイナク族にも「しあわせ」という言葉はなかったが、縄文にもこの概念はなかった。

一九九九年十二月二十八日の朝日新聞に「しあわせのみ願い、見失ったさいわい」と題する降幡賢一氏の小論が載った。要約すると次のようになる。

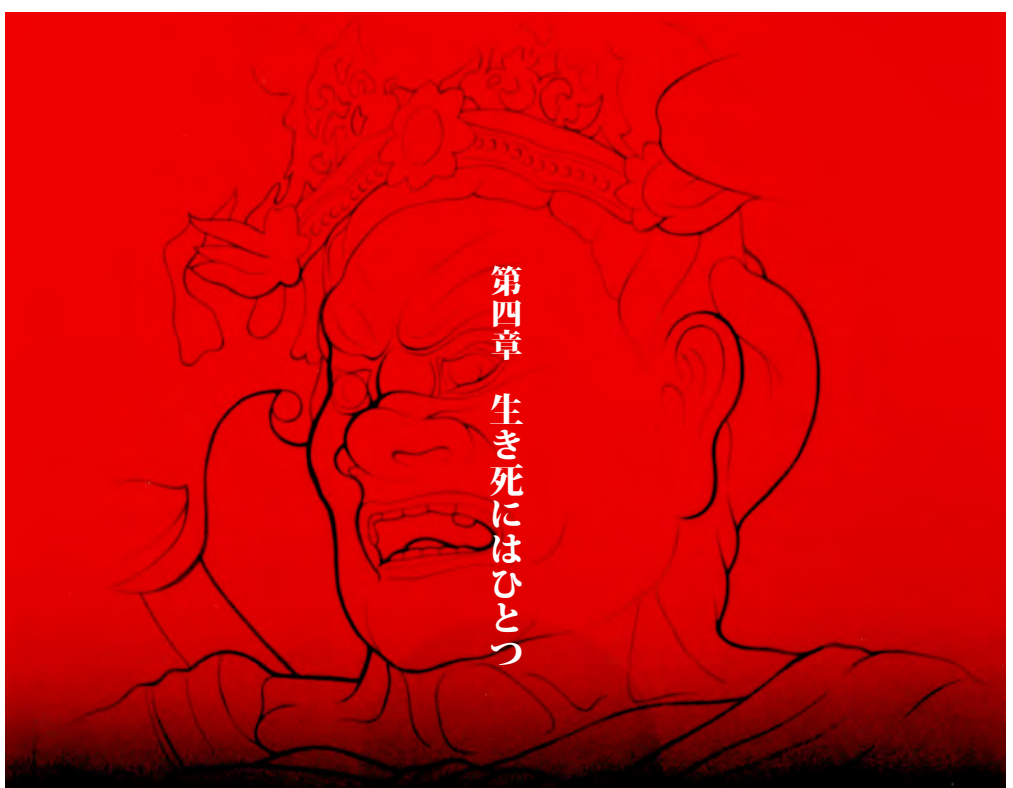
幸福はしあわせと読まれるのが普通だが、かつてはさいわいと読んだ。しあわせは仕合わせ、つまり、めぐりあわせである。運がいいか悪いか、しあわせかふしあわせか、という個人の出来事である。対して、さいわいとは幸田露伴の「文明の庫（くら）」にある文章のように、「人間の幸福は必ず人によりて造られたる

ものなり。人間には〈ひとのよ〉と、幸福には〈さいはひ〉とふりがながある。つまり、〈ひとのよのさいはひ〉。それは一時一世にして成り立ったものではなく、少しずつ〈人の造り出したる幸福のあつまり積もりて成れる〉ものなり。」

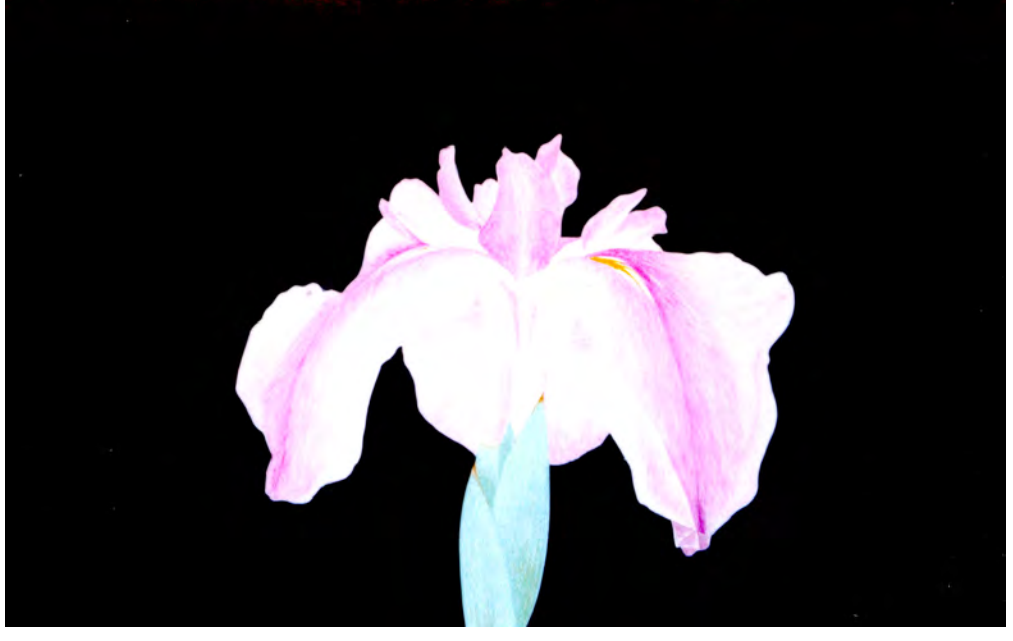
縄文人には集落や村落、もっといえば縄文人全体の〈さいわい〉はあっても、個人の〈しあわせ〉はなかった。〈しあわせ〉は〈さいわい〉に含まれていたし、従属していた。というよりは〈さいわい〉が〈しあわせ〉そのものだった。だから、〈さいわい〉だけが問題だったのだろう。

現代人は〈しあわせ〉にこだわりすぎて、〈ひとのよのさいはひ〉を忘れてしまった。言葉をかえて言うと、現代は私益が優先されている。私益だけしかないように見える。公益がなければ私益などありえないのに、私益だけになっている。これはもう社会とは言えない。

縄文人はその末裔であるわれわれを嘲笑していることだろう。縄文人には絶対自然と、その自然を公益とする価値観があった。しかも、それは生活律になっていた。観念や理屈ではなく、日常生活で守るべき規範だった。何があろうと絶対に崩さないこの掟があったからこそ一万年を超えて文化を維持できたのだろう。現代においても、縄文人が持っていたと同じような生活律を崩さない先住民がいる。メイナク族などはまさにこうした人々であり、現代の縄文人といっていいように思う。



第四章　生き死にはひとつ



死生観

現代人は死を受け容れていない。生きている間が華、死んでしまえば元も子もないと考えている。死期の迫った人間は殆どの場合己の死を自覚しているといわれるが、告知を拒否した家族に合わせて知らない振りをし、嘘をついている家族に合わせる方が辛いという。本人は死を受容しているのに、家族は死を受け容れず拒否しているからだ。

縄文人は死を日常的に受け容れていた。彼らにも死に対する恐怖はあったろうが、現代人と違うのは死に対する定見を持っていたことだと思う。縄文人は人間も他の生きものと同じように役割を持って生きており、役割が終わった時に死が訪れると考えていた。動物は生殖能力を失った時が死を意味している。

それでは人間の役割とは何なのか？縄文人はどう考えていたのか？

人間は寝ている状態でも自然界とつながっている。空気や水や食べ物を通じて外界とつながっているし、細胞は血液を媒介として新陳代謝を続けている。自然との一体感という役割である。

起きている状態のときは人間社会というつながりを持っている。社会との一体感という役割である。

人間が意識的に活動している状態は文化的な状態であり、文化的世界とつながっている。これは人間の文化的役割といえる。

無意識状態のときはどうであろうか？　夢をみているようなときは、人間は気とか宇宙とつながっている。これは宇宙的役割といえる。

自然との一体感・社会との一体感は人間の肉体レベルの役割であり、文化的・

宇宙的役割は人間の精神レベルの役割である。これらの役割は個としての人間が完結できるものではない。人間の役割は個の生死を越えて伝承される種としての役割である。

死によって肉体が消滅しても、種としての役割を持つ魂は消滅することなく再び人間に宿り役割につく。不滅の魂の再生は縄文人のとてつもなく大らかで明るい死生観だった。

死は生の始まり

縄文人は現代人よりもはるかに自然を熟知していた。それは細切れの知識ではなく全体的な知識だったし、頭というよりは体で理解していた。一見無関係に思えるもの同士の関係もわかっていた。例えば、ユリの花が咲くとウニが食べごろ

になるとか、フジの花が咲くとメバルの漁期であるとか、桜が咲くと鯛がうまいとか、ブリ起こしといって十二月の雷がブリを呼ぶというようなことである。

人間の生き死にについても自然の脅威を熟知していた。火山の噴火、地震、津波、寒冷化、感染症、飢餓、採取労働中の自然災害や事故などにより死は日常茶飯事だった。乳幼児の夭折も六～七割と高く頻繁だった。平均寿命は二十代後半から三十代前後で、三十代を越えると五十代くらいまで生きたようであるが、若い肉体で突然の死に直面した。そこには抗しきれない恐怖、どうすることもできない無力感、絶対的喪失感、深い悲しみがあった。自然に対する畏怖はわれわれの想像を絶するものがあった。

自然に対する内面からの畏怖が、自然の脅威を鎮めるための祈りと祭祀を生んだ。すべてのものには霊が宿るが、災いは悪霊のせいだと考えた。その悪霊を鎮める祈りと祭祀こそ縄文人の知恵だった。自然を畏れ、畏れるゆえに祀る心があ

ればこそ信仰は深いものになる。縄文人は毎日毎日を信仰に浸って生活した。

毎日死と直面し、死を見つめながら、縄文人は実感として死は生の始まりであり、命は自然に還ってはまた生まれ還ると考えた。死と生は一体であり、つながっていると考えた。死は再生のための過程だった。だから死に遭遇するとひたすら祈り、礼を尽くして祀った。

自然のすべてに霊性を感じ、とりわけ強き存在、蝮のような脱皮する存在に神性を見た。強く、脱皮するものをひたすら崇めた。

墓は親しく、神聖で、集い祀る場所だった。成人の墓は集落の外ではあるが近かった。乳幼児は家の付近や戸口に甕に入れて埋められていた。妊婦の死には二度葬が行われた。縄文人にとって墓は近く親しい祭祀の場であった。

死のとらえ方

日本には死のとらえ方が三つあるという（大野順一「死生観の誕生」）。それは次の通りである。

「ひとは死ぬ」というときの死がある。生とかかわりのないところで死をみる。生と死は無関係で、生がただそこにあるように、死もただそこにある。歴史的には奈良から平安時代の半ばごろまでの考え方だとされている。記紀万葉から八代集あたりまでの詩歌にみられる。

「死なぬひとはいない」という死がある。生あるところ必ず死があると考える。死は生と対立し矛盾する。無常哀感、無常美観としての死である。平安末期から鎌倉時代初期の考え方のようである。平家物語に代表されるように死は生の否定態だった。

「死ぬのがひと」という死がある。生と死を一体と考える。死を考えることなしに生はありえない。死において生ははじめて生でありうる。中世の徒然草に代表される。死を畏れ、死を生の一大事として畏敬する。そのことが生をいきいきさせると考える。

徒然草は縄文人の末裔なのだろう。ひとは夜眠りにつくことで死に、朝太陽とともに起きて生まれると信じていた彼らは死と生を連続した一体のものと考えていた。

縄文人は一人一人の自然死のほかに、感染症と火山や津波などの自然災害で集団として一挙に死を迎えることが多かった。それは源平の戦乱期に似ていたかもしれない。あるいは広島や長崎の原爆投下に似ていたかもしれない。阪神大震災もそうだろう。多くのひとびとが集団的に、他律的で不測の死を迎えた。乱世の死である。

しかし、縄文人はこれら眼前の死をすべて日常的に受け容れていた。死を直視していた。生と連続したものとしての死をシッカリ受けとめていた。死の受容が縄文人をたくましくし、強靭にしたのだと思う。阪神大震災の現代人のような魂の迷いはなかった。何年も立ち直れないということもなかった。茫然自失してうろたえることもなかった。縄文魂の崇高はどうもこのしたたかな死生観にあったのではないかと思えてならない。

愛とは死に場所

昭和四十（一九六五）年に亀井勝一郎が著した「現代人生論」なる本がある。そこで展開されている愛の本質論は縄文人の夫婦観に通じているのではないかと思う。

亀井勝一郎の愛に関する論説を要約してみよう。

愛は人間の根本問題であり死と同じである。いのちの極限の燃焼・完全燃焼が愛であり、人生の根本の覚悟が愛である。人間の物欲や情欲がすさまじければすさまじいほど、人間はそれを機縁として愛の純潔を志す。愛は欲情との闘いであり、愛は死と同じように危機の上にある。だから、愛はいのちのすべてをかける。愛はそこに悔いることのない死に場所を求めることである。

縄文人は男も女も愛を死に場所と考えたように思う。近親相姦を避ける広域の外婚圏を持ち、集落や村落の中に夫婦を中心にした家族をキチンと位置づけていた。しかも、普通人が高い霊性を持っていたので、一人一人の心の中は手にとるように見えていた。邪心や下心はすべての人々に見え見えだった。そんなところで不倫などは起こる筈もなかった。その上、三十歳前後という寿命が一婦一夫の核家族に純潔の愛をもたらした。縄文人の夫婦愛は深く重かった。

そしてそれ故に縄文人の夫婦はまっとうな社会人であったように思う。

現代の結婚観や夫婦観を概観すれば、我々の愛には縄文人のような深さも重さもない。例えば、極く普通の夫婦をとりあげてみよう。妻の愛は夫に死に場所を求めていることが多い。それ故、子育てや家計の苦労に耐え、家族の中の孤独にも耐えることができる。ところが、夫は妻に母を求めていることが多い。妻の愛のような深さも重さもない。愛は死に場所ではなく、仮住まいかもしれない。

中高年夫婦の離婚が増えつづけている背景に愛に関する深さと重さの落差を垣間見る。例えば、夫の不倫は妻の積年の苦労を無にする。そればかりか、夫に死に場所を置く妻にとって積年の信頼を反故にする。夫の喧嘩や博打や金銭問題には耐えられても、夫が他の女性に走ることは妻自身の存在の根拠を否定される、許されざることなのである。そこには、男女の生理的構造論や牡雌論の及ばない深く重いレベルがあるように思う。

置きかえない生き方

縄文人の生き方は生活全体が生産行為だった。生活は生命を活かす暮らしそのものだった。自然から食べ物を採取し保存すること、日常的に若い死を受け容れまっすぐに死に向き合うこと、土器や土偶を創造すること、火山と祖先の神々に畏怖し感謝と祈りを捧げること、そして祭りを行うこと、これらのすべてが生命を活かす生産行為そのものだった。

縄文人の生活はすべて純粋に生命を活かすためのものだった。それ故、普通人が高い霊性を備えていた。文字もいらなかった。言葉さえ不要だった。そんなものがなくても大切なものをみんなが共有していた。

このような生活では裸の自分がみんなの前にさらされている。嘘も偽りも通じない。ありのままでいるしかない。だから、仮の自分を作る必要などない。自分を何かに置換する必要はない。生身のままがいい。縄文人の生き方は恐らく生身の自分、ありのままの己を磨くことだったと思われる。

現代人はいつも己を何かに置きかえている。そうしないと安心できないからだ。例えば、

何をよすがに生きるかが不透明な人々が、己の人生観を見栄えのいいある種の宗教に置きかえる。自分の心にその宗教をカセットのようにはめ込む。そしてそれがあたかも自分の本心であるかのように錯覚する。

自分の人生を会社に置きかえる人も多い。会社におけるちっぽけな役割をあたかも自分の人生そのものであるかのように思い込む。会社の仕事に没頭することが自分の生きがいであるかのように盲信する。会社の仕事が人生のすべてだと勘違いする。

人間はすべてのものをお金に置きかえる。お金さえあれば何でも適うと思い込む。お金そのものが目的になる。生命も、愛も、お金でなんとかなると思い違いをしてしまう。

バーチャル・リアリティ、仮想の現実感とでもいうのか、これも置きかえである。実際ではない、仮のものや偽者に現実感などあるわけがない。しかし、それをわかったようにわかるというわけである。縄文人がありのままに直視した死を、現代人は最後まで避ける。生きている内が華、死んでしまえば元も子もないと思っている。確信のもてる死の定見を持つことを避けている。

命は魂

沖縄やアイヌに残っている縄文の色濃い葬送、例えば、死体を墓に入れるだけの「野辺送り」をし後日骨を取り出し洗って戻す習慣、死体を山野へ捨て住

まいの近くに形見を祀る「捨て墓と参り墓という両墓制」（沖縄）、胎内にあるまま埋葬し後で胎児を取り出し母とともに埋葬し直す「胎児の葬送」、住まいの入口の下に甕に納めて埋葬する「幼児の葬送」（アイヌ）、これらのことは一体何を意味しているのか？　中西進著「日本人とはなにか」が示唆に富む。

縄文人は死を植物が「しなえる」ように、水分がなくなった状態であると考えていた。みずみずしさがなくなったとき人は死ぬ。これは「枯れる」ことだった。そして枯れることは「離れる」ことだった。死は何かが離れることで、何が離れるかというと「魂」である。肉体の水分が枯れて死に、魂が肉体から離れて、肉体は亡骸になる。

縄文人は死を忌み嫌わなかった。死を日常として受け容れなごやかに暮らしていた。死をいっぱい含みながら生きているのが命であり、「死ぬことは普通」のことで、「生きることが予想外」のことだった。

肉体を仮の宿としていた魂は、死によって「根の国」へ旅立つけれども、魂が抜けた亡骸は根の国へは帰れないので自然に戻し捨てる。胎児や幼児も、まだ根の国へ帰る力がないので、もう一度母の胎内に宿れという葬送を行った。

魂は宿っている肉体が死ぬと他の肉体に移る旅に出る。他の肉体とは子供や孫である。縄文人は「魂は子々孫々の肉体の中に永遠に宿りつづける」と信じていた。旅立ちを励まし、再生を祈り迎えるのが葬送だった。

縄文人が考えていた命は、肉体ではなく魂そのものだった。肉体は違っても魂は同じであり、祖先の魂が永遠に続き、肉体だけが次々に新しいものに交替していく。子孫は祖先の生まれ変わりであり、祖先は子孫であり、子孫は祖先だった。肉体は滅びても魂は永遠に子孫の中に生き続ける。だからこそ死ぬことは普通のことであり、それほど重大なことではなかった。ＤＮＡは祖先の記憶の

総体を載せて子孫に伝えているといわれるが、その記憶の主体こそが魂である。

人はなぜ死ぬのか

人は一〇〇％死ぬ。縄文人はそのわけを知っていた。彼らは宇宙そのものが消滅に向かっていると信じていた。宇宙が消滅に向かうその中にいる人間は個としても、種としても当然死ぬ。人の死は宇宙の消滅に組み込まれた壮大な出来事なのだ。

今、それを現代科学が解き明かしつつある。宇宙はビッグバンという大爆発によってエネルギーを蓄え、そのエネルギーを使って惑星をつくり、地球をつくった。鉱物や植物や動物、そして人もつくった。何かが生みだされるたびに自然界が変り、その変化に適応するためにまたエネルギーが使われる。エネル

ギーは次第に小さくなり消滅に向かっていく。

年老いて人が死ぬのは変化に適応できないからだ。変化への適応能力がなくなったとき人は死ぬ。だから、人が種として存続するためには、個としての人は死に続けなければならない。こういうことがわかっていた縄文人の死はおおらかだった筈だ。

人は三十代遡ると一億人になるという。三十代で一億人の親類がいることになる。私の中には一億人の血が流れている。そしてまた私も一億人の一人になる。死ぬということは一億人の連鎖に入ることである。もし、たった一人の私がいなかったら一億人目の一人につながらないことになる。死は実に荘厳なのである。

人は死を恐れる。それは誰も死んだことがないからだ。本当に死ねば蘇生する筈はないから臨死体験も死の体験ではない。人は耐えられない恐怖や苦痛を

受けると意識を失う。事故のような突然死の場合も眠りに落ちるのと同じようにストンと意識がなくなって安らかに死ぬ。

死の瞬間には「えもいわれぬ心地よさ」に包まれるという。これは脳が死のギリギリの瞬間にエンドルフィンやエンケファリンという麻薬に似た物質を放出するためなのだそうだ。これを知っている医者は死ぬのは怖くないというそうだ。縄文人のようにいかに生きるかだけが大事なのだろう。いかに死ぬかで悩むなんて些細で実につまらない。

人はなぜ死を恐れるのか

人が死を恐れるのは、死に直面した時の痛みや苦しみ、死後の世界への不安からだ。

死に伴う痛みや苦しみは、実際には死の直前には脳へ伝達されないらしく、そのせいで殆どの場合死に顔は穏やかだ。

死後の不安という恐怖は、誰も死んだことがないのでわからない。だから、専ら考え方の問題だと思う。さまざまな考え方がある。

たとえ、フィクションとしても死後の世界というものを考えた方が生き方というのは豊かになるのではないか？（山折哲雄）

生と一体としての死を受け容れ、死を日常的に直視すると生が鮮明になる。充実した生があれば死は取るに足らないものになる。世界の八〇〇〇メートルを超える十四の高峰を無酸素で登頂したラインホルト・メスナーは「死の恐怖を感じたことはない。それは死が自分にとっては取るに足りない問題であるからだ。」と言っている。縄文人は生かされていることをありがたきことと考えていたから、死は取るに足らないものだった。逆に、現代人のように「死がタブー

化されると恐怖が残る。」（ベッカー）とも言われる。

肉体と精神のほかに意識体としての魂の存在を信じることができれば生は豊かになる。意識や意志や知識や論理は脳の働きとして肉体に直結しているが、無意識や直観やテレパシーや夢は肉体とは別の次元から生まれるように思う。これらを魂というなら意識体としての魂は存在する。魂が肉体を仮の宿とし死とともに肉体を離れる、あるいは魂は永遠であるという考え方も充分に説得力がある。縄文人は永遠の魂を信じていた。

輪廻転生や神に召されるという考え方もある。アメリカ人の七割、日本人の六割が死後の世界を信じているという。臨死体験、例えば、魂が体を離れる幽体離脱とか、精神が体を離れる体外離脱というのもある。これが、死後の世界を見るリアルな体験なのか、死を目前にして脳機能の低下した状態で見るイメージなのか、あるいは神経が遮断され体性感覚がすべて消失する状態で起きる幻

覚なのか、本当のところはわからない。しかし、臨死体験者は一様に「死ぬのが恐くなくなった」というそうである。

第五章
慎食は最高の陰徳

自給自足

縄文人は自給自足だった。自分自身の力で衣食住の生活を手当てし、生命をつなぎ、そしてそのこと自体に満足していた。

家族単位の独立した住居があり、集落には一戸の単独集落、三戸程度の親族集落、複数の親族グループの共同体集落などがあった。集落内の広場には貯蔵、調理、埋葬、祭祀の共同施設があった。集落の生活領域は半径二〜三キロになっており、これが植物採取の入会権になっていたのだろう。集落間は二キロ以上空けられており、集落としての植物採取の自給圏が自然に形成されていたものと思われる。

いくつかの集落が共同で行っていたのが狩猟や漁労だった。収穫は共有、分配は平等だった。そして婚姻もこの範囲で外婚だった。これが村落共同体を形成し、動物採取の自給圏になっていた。

定住を前提として植物や動物の自給圏があるということは、人口も自動的に調整されていたと考えられる。食糧が増えれば人口も増えるが、自給圏の食糧は一定だったろうから、人口も一定に維持されていたのだろう。縄文人は自然物を取りすぎれば、定住が崩れることを熟知しており、余分な採取を行わなかった。採取限界や捕獲限界を掟としてもっていた。一日の労働時間が三時間というのもそのためだったと思われる。直接生産に結びつかない土器づくりや土偶づくり、それに祈りや祭祀も生活歴に計画されていた。

縄文人の自給圏はまさに地域限定だったから、その依拠する自然系によって多様で個性的な存在だった。かなり遠い地域との交易はこれを背景に成り立っ

ていた。縄文人の生活歴によると、交易は三〜五月、八〜十月に集中していたようであるが、この交易圏は村落共同体間の分業と協業の自給圏といってもいいかもしれない。

縄文人の自給自足システムを支えていたのは、自然の循環リズムに合わせた生活そのものであり、普通人が終生失わなかった直観ではないかと思う。とりわけ遠隔地との交易などは直観に導かれたテレパシーの存在なしには理解できない。

二十一世紀の自給自足

二十一世紀は自給自足の時代だと思う。なぜなら、まず、現代の経済構造は人間の生存条件を否定しているが、この生産至上主義に基づく経済が成り立たなくなってきた。もうひとつ、二十世紀を支えてきた競争原理がもう破綻してしまった。

今、世界はヨーロッパを初めとして自給自足圏の形成へと向かいつつある。内橋克人著「環境知性の時代」にその報告がある。

第一に、食糧の自給自足が意図されている。アメリカ・カリフォルニア州デービスでは百三十種類以上の野菜を自給しているという。また、中心部から半径六〇〇メートル以内にすべての施設を集中させて、住民は徒歩か自転車で生活必需品のニーズを満たすことができるまちづくりも行われているという。

第二に、エネルギーの自給自足も盛んである。デンマークでは一九七三年に二パーセントだったエネルギー自給率が今九八パーセントに達している。これは市民の共同発電による成果だという。風力、太陽熱、太陽光による発電を電力会社が購入し、国も補助金や消費税の還付で支援している。

第三に、人間関係の自給自足も進められている。年寄りも若者も、ハンデのある人もない人も、豊かな人も貧しい人も、同じ地域に一緒に生活するまちづくりが介護の自給を可能にしているという。そして、さまざまな人々が共同生

活をするライフハウスの試みもあるという。

21世紀の自給自足は生存条件の維持を絶対原理としなければならない。それは連帯と統合の原理である。対極にある競争原理が分断と対立を原理にしていることと比較するとよくわかる。快適と効率を追求するライフスタイルは実は競争原理に基づいている。

二十一世紀の自給自足は快適と効率というライフスタイルを捨ててはじめて可能になる。われわれにそれができるかが問われる。縄文人が自然の恵みを享受するために自らに課した厳しい戒律をわれわれは持てるのか？　都市化が進む直前まで村落に厳然としてあった村八分の掟をわれわれは呼び戻せるのか？

もうそれはいまさら不可能なのかもしれない。そうなら延命にすぎない無駄なあがきはやめにして、ただ滅亡を待てばいいだけである。

一万年の視点

宇宙の誕生は二〇〇～一〇〇億年前、太陽系の誕生は四十六億年前、地球上に最初の生命である単細胞生物が誕生したのが三十六億年前、そして人類の誕生は三〇〇万年前だとされる。人類は宇宙では全くの新参者で、まだ宇宙から認知さえされていない。

生物圏の物質・エネルギー循環によって生み出されるものを受動していた人類が、地球システムの物質・エネルギー循環に能動的に働きかけるという文明を持つようになってからまだ一万年程度の歴史しか持っていない。だから、宇宙から地球を見ると一万年の視点が持てるのだろう。縄文人にはこの一万年の視点があった。

縄文人は生物圏の循環に身を委ねただけではない。同時に、生物圏を越える地球システムの循環に働きかけた。栗の栽培はその典型である。米の栽培もそうだ。彼らはこれを通じて食の安定を図った。まさに文明の開花がここにある。しかし、彼らはこのことが自然破壊であることを熟知していた。だから、自らに掟を課したし、祈りを捧げ、魂送りを精魂込めて行った。

一万体を越える縄文遺体が発掘されているのに肥満は報告されていない。何故なのか？　それは縄文人が「生命は食に随う」ことを熟知していたからではないかと思う。生命と食は同体であり、食の本質は自然界の生命を体内に取り込むことである。すべての生命は他の生命の存在を前提に成り立っている。それ故にこそ縄文人は食を慎んだ。腹六分で満ち足りた。足るを知っていた。縄文人は常に飢餓状態に適応していた。旧石器時代に適応していたと言われる所以である。人間の体は飢餓状態にある時が各種ホルモンが最も分泌されて健康

だという。逆に過食や栄養過多に対する抵抗力は全くないようである。

食を慎むことは生命を大事にし、生命のつながりを尊ぶことである。それは食を節することが生命を施すことに通じるからである。縄文人の食は再生する故に許された神殺しによって支えられていた。しかも、地球システムに働きかけること自体が自然破壊であり、食の安定そのものが悪霊を呼ぶことを縄文人は知り尽くした上で、その償いを自然への祈りと掟の遵守によって貫いた。これもまた一万年の視点といえる。

命いただく食

縄文人は実にたくさんのものを食べた。植物三〇〇種、魚類七〇種、貝類三五〇種、哺乳動物七〇種、鳥類三五種と推定されている。何故、そんなに多

品目を食べたのか？　第一は旬の食材を食べたからだ。日本のように四季がある地域では季節ごとに完熟するものが違い、その完熟したものが人間の体に適応していた。第二は自然採取の生活を続けるために生態系の維持を掟にしていたからだ。特定の種類に集中することなく、食べられるものを少しずつ満遍なく食べた。第三は食べ合わせの知識があったからだ。例えば、肉を食べるときには野草を三倍以上食べ、魚を食べるときには野草や海藻やみょうがやわさびなどを食べた。消化酵素や毒消しのことを体で熟知していたのだろう。

縄文人は食べることを命をいただく行為だと考えていた。他の生き物の命を自分の命としていただく、地球上の生命体を自らの体内に取り入れて生きていると考えた。だから、食べ物は余すところなく食べ、そして骨や貝殻などは食用以外のさまざまな用途に使いきった。それでも残ったものは貝塚にていねいに埋めた。貝塚はゴミ捨て場ではなく、いただいた命に感謝し、その魂を自然に送り帰す祈りの場であった。縄文人はすべてのものに魂が宿ると考えていた

から、いただいた命の魂を自然へ送ったわけである。

縄文人の食糧確保には日常的に大きな緊張感が伴っていた。寒冷化や天災、例えば、台風、地震、洪水、津波、火山爆発などによる飢饉は日常茶飯事だった。感染症で集落の大半が死に絶えることもしばしばであった。乳幼児死亡率も高かった。冬季の食糧保存にも手間暇がかかった。自然に沿う生活はある意味で自然に翻弄される生活でもあった。しかし、自然の摂理に背いたり、それを妨害すれば更なる苦衷が待っていたから、自らに厳しい掟を課すことで自然の摂理に忠実に従った。このように生きるための緊張感、生命維持の緊張感が縄文人の細胞を大いに活性化した。生命維持の緊張感こそ知恵の源泉となった。地球上で、命と命が循環し、その緊張感が知恵を育む、これこそが自然の摂理なのだろう。命をいただくからこそ、知恵が生まれるのだろう。

慎食

食べることが持つ根源の意味は縄文時代に既に確立された定見があったように思う。

人間が何を食べるようにできていたか、つまり、食性は縄文時代に決まっていた。食性は、口や歯や爪などの形態、腕力や脚力、味覚や視覚や嗅覚や聴覚などの感覚器、消化酵素の種類や活性などの機能によって決まる。縄文時代、人間が裸の状態で、全身を使って手に入れることができたものは、基本的に動かないものだった。先ず植物、そして浅瀬の貝類、さらには簡単に捕らえることができた虫や小動物であった。

同じ縄文人でも生活の場所が違えば食性も違っていた。全体として植物中心の食生活であったが、北と南、山と海とでは食性に差があった。生活圏にあるものしか食べられないからである。生活圏にあるもので食生活の体系が決まり、長い時間をかけて体もその食生活に適応していった。

生命と食は同体であった。生命は食に随っていた。自然界の生きものの生命を縄文人は自らの体内へとりこんで生きていた。だから、「いただきます」であり、本心からの感謝が込められていた。

縄文人の食のありようにはいくつかの摂理が働いていた。季節に熟するものを食べた。何も捨てず全部食べた。極端な加工をせずに食べ物の生命力を活かして原形のまま食べた。腹一杯ではなく腹六分を守った。よく噛みユックリ食べた。

長期の保存に難があり、自然に依存する度合いが高いほど凶作もあり、食は

常に慎ましい状態にあった。日常的に慎食が定着していた。特定の誰かが専有することもなかった。縄文人の体は旧石器時代に適応しており、いわば飢餓状態がすべての機能が活性してもっとも健康的だった。一人一人が自分の食を節して、常に他人に施す心構えを持っていた。そこには生命の元としての食を献じることを通して、自分の生命を献じるという摂理があった。後世、水野南北はこれを「慎食は最高の陰徳」と絶賛した。

大らかな食

「百歳の食卓」（荒川典子＆田中久恵共著・廣済堂出版）という本を読んだ。二〇〇〇年の日本には一三、〇三六人の百歳以上の人がいるのだそうだ。しかし、その大半は寝たきりだという。この本には百歳を越えて元気な十一人が登場している。私はこの十一人に縄文の食を直観した。

毎日体を動かしている。畑仕事を５時間する人、家族と分担した家事が決まっている人、そしてみんな身の回りのことはこまめにしている。外の仕事は雨が降ればお休みだ。大らかそのものである。

好き嫌いのない人が殆どだ。何でも食べる。お米を筆頭に植物食が中心だが、鰻や肉やマグロの刺身やてんぷらのように脂っぽいもの・味の濃いものが好きな人もいる。そんな好きなものしか食べない人もいるが、まわりの家族が野菜や果物をたっぷり食べさせている。四世代同居、近所に子や孫がいるなどみんな家族に囲まれている。わがままだが、家族の中で役割を持ち、かけがえのない存在として尊敬され大事にされている。

旬のものを食べている。旬に完熟するものが体に適応していることをよく知っている。しかも、住んでいる近くのものを食べている。殆どの人達が畑や家の

まわりで野菜などを作っている。

食べ方にも共通点がある。少しずつ何回も食べる。一日に五回食べたり、お腹が減らなければ一日二食もある。一日三食なんて決めていない。お腹が減ったら食べる。ユックリ時間をかけて食べる。しっかり噛んで食べる。そして全部食べる。小魚は骨まで食べる。だから骨も丈夫だし、ボケたりもしないのだろう。

食卓は賑やかで明るい。毎朝ミーティングをしている家族まである。新聞を隅から隅まで読み解説を受け持っている人もいる。新聞だけでなく本もよく読む。知識欲は旺盛だ。みんなと一緒でありながら、ひとりだけの時間がちゃんとあり自立している。その上、いくつになってもオシャレだ。センスもいい。やぼったくない。家族に信頼され、相談され、手本にされている。そういうことが食卓で語られている。大らかな食を満喫している。

食べることは神殺し

縄文時代の土偶は先ず、女性像という特徴を持つ。その上、殆どが妊娠を思わせる状態を表現している。しかも、大半の土偶は意図的に破壊されたかのような断片で発見されている。

古事記のオホゲツヒメや日本書記のウケモチという食物の女神、イザナミとカグツチという火の女神の神話と殆ど同じ神話が、実はインドネシア、メラネシア、ポリネシア、さらには南アメリカや北アメリカに分布している。

これらの神話に共通していることがある。先ず、食物の女神が排泄するものが人間にとって必要な食物になる。そして、その女神は排泄行為によって食物

を作ることを嫌われて殺されてしまう。さらに、殺された後、女神は断片にされてあちこちにばらまかれる。その上、女神の断片がばらまかれた所に人間の食物となる草木が繁る。

火の女神の神話の共通点も食物の起源と同じである。生ものを性器から出す火で調理し、それが汚いとされて女神が殺される。イザナミは大火傷をして死んでカグツチを生み残す。こうして人間に火がもたらされたことになっている。

人間の食べ物は神の死によってもたらされた。食べることは神殺しだった。神を殺して人間は生を得ていた。何故、そんなことが許されたのか？　それは神が循環そのものだったからである。神は再生するのである。

神の排泄物が食物となり、神の死体が草木となるわけだから、これは循環であり再生である。性器から火を出し、死体が火を残すというのも、循環と再生を示す。

こうみてくると縄文の土偶は女神そのものだといえる。妊娠の像は再生の象徴だし、破壊された断片は食物そのものを示している。

縄文人は神殺しによって食の恵みを受け、火の恩恵に浴した。土偶は食の神殺しに対する畏敬と感謝を、土器は火の神殺しに対する畏敬と感謝を、一途に表しているのだろう。神を殺して受けた恵みである食と火であればこそ、これを真心をこめて扱った。

食の摂理

縄文人の食は自然に沿う生き方の基本だった。彼らは食を命の根源と考え、生き物の命をいただく行為として自覚し、採り尽くさずに循環をはかった。

多分、次のような食の摂理をもっていたと思う。

1 自然にあるもので食べられるものはすべて利用する。
天然自生の植物や野生の動物をたくさん、そしてすこしづつ食べた。

2 生まれた土地のものを食べる。
身土不二、体と大地は切り離せない。人間は生まれ育った大地に適応している。
だから、生まれた土地でできるものを食べるのが体に一番いい。

3 旬に食べる。
植物や果物ならそれが完熟するとき、魚なら産卵期でたんぱく質や脂肪がのっているときに食べる。旬に食べるのが最も栄養がありおいしい。
人間の体温が高くなる季節にはトマトやスイカが旬を迎え、体温が低くなる季節には根菜類が旬になる。野菜や果物の旬は人間の体にも適応している。

4 原形で手にいれる。
食べ物は元の形のまま調達する。そしてできるだけ食べる者が調理する。

食べやすくするためにあく抜きをしたり、保存をするための技術が発達した。

5

使いきる。

どんな食材でも使いきった。採取したものは全部食べる。食べられないところは狩猟採取や生活用具として使う。それでも残るものは丁寧に大地に還し感謝をこめて祈った。現代の残飯は調理の間違いと量の計画の間違いから起こるが、縄文人は採取のときから量の計画が六分だったから残飯は出なかった。

6

腹六分にする。

満腹しない。腹六分に食べた。ユックリよく噛み、味を吟味すれば腹六分で足りた。人間の体は今でも旧石器時代に適応してるといわれ、飢餓状態の時が各種ホルモンが最もよく分泌される。縄文人はそのことを熟知していた。

過食や栄養過多は人間の抵抗力を壊滅させる。食の乱れは体を蝕み、心を荒廃させる。そしてやがて社会を無秩序にする。

縄文一万年の謎は本質的には食の摂理に隠れている。食に摂理がある限り人は自然に沿い間違うことはない。

箸から遡る縄文

土器を使って煮物をしていた縄文は箸なしでは考えられない。今に残る箸の作法は縄文を彷彿させる。

迷い箸……箸を持ちながら何を取ろうかと迷うのは恥ずかしい。
横箸……箸についた飯粒やおかずを箸を横にしてなめるのはよくない。

仏箸……おかずを箸から箸へ渡すのはご法度。これがいいのは遺骨だけ。
箸なまり……ひとつの菜にいつまでも箸をつけること。
さぐり箸……自分の好物だけを選んで食べる意地の悪い食べ方。
もじ箸……煮物などを引き寄せアチコチ掘り起こして食べること。
うら箸……食べようとして一度箸をつけたのに取るのをやめること。
膳なし箸……ご飯とおかずを代わる代わる食べずにおかずだけを食べる。
諸おこし……お椀と箸を同時に取るのは見苦しい。
ちょうぶく箸……箸を逆に置くこと。
にぎりこ箸……一方の箸についたものを片方の箸で取り除くこと。
込み箸……あちこちの料理を次々に箸で取り、それを一口で食べること。

箸は食の基本に迫る。
それはまず食が礼であることを示す。人間以外の生き物の命をいただく行為が食だから、食する生き物に最高の礼を尽くす。迷ったり、粗末に扱ってはいけない。

そして、箸は食事のありようを示す。個食はない。共食だけが食のあり方だった。神と共に食べ、家族と共に食べるのがきまりだった。食べ物は他の生き物の生命であり、人間に恵みを与える故に神だったから、食べることは神を殺すこと、神を食べることは神を体内にとりいれることだった。しかも、家族みんなが和やかに規律をもって食べた。

食法が心の鍛錬そのものだった。食事の場が試練と鍛錬の場であった。神と共に、家族と共に、律に沿って食べることが心を鍛える場であった。腹六分の慎食、命への礼、そして家族の律と絆、食にはこれらが凝縮されていた。最も欲望を露にする食の場が、欲望を抑制する試練と鍛錬に使われた。

箸は今乱れている。食の乱れが民の乱れを語り、民を亡ぼす。箸の律なくして民はなく、国もない。

健　康

縄文人は健康をどう考えていたのだろう？彼らには現代人には及びもつかない考えがあったのではないかと思う。

どこかの国では健康管理ができるかどうかが優れたビジネスマンの重要な要件になっているという。毎日出勤時に体重測定をする企業があるし、定められた体重を超過すると降格される企業もある。あるいは喫煙していなければ健康保険料が割安になる企業もある。ビジネスマンにとって健康は重大なストレス源になっている。だから、「健康のためなら死んでもいい」と思っているビジネスマンもいるという。

不思議なことに、新薬の開発は目まぐるしいのに病人は増える一方である。医療費が急増しているのに病人はそれに倍して増えている。

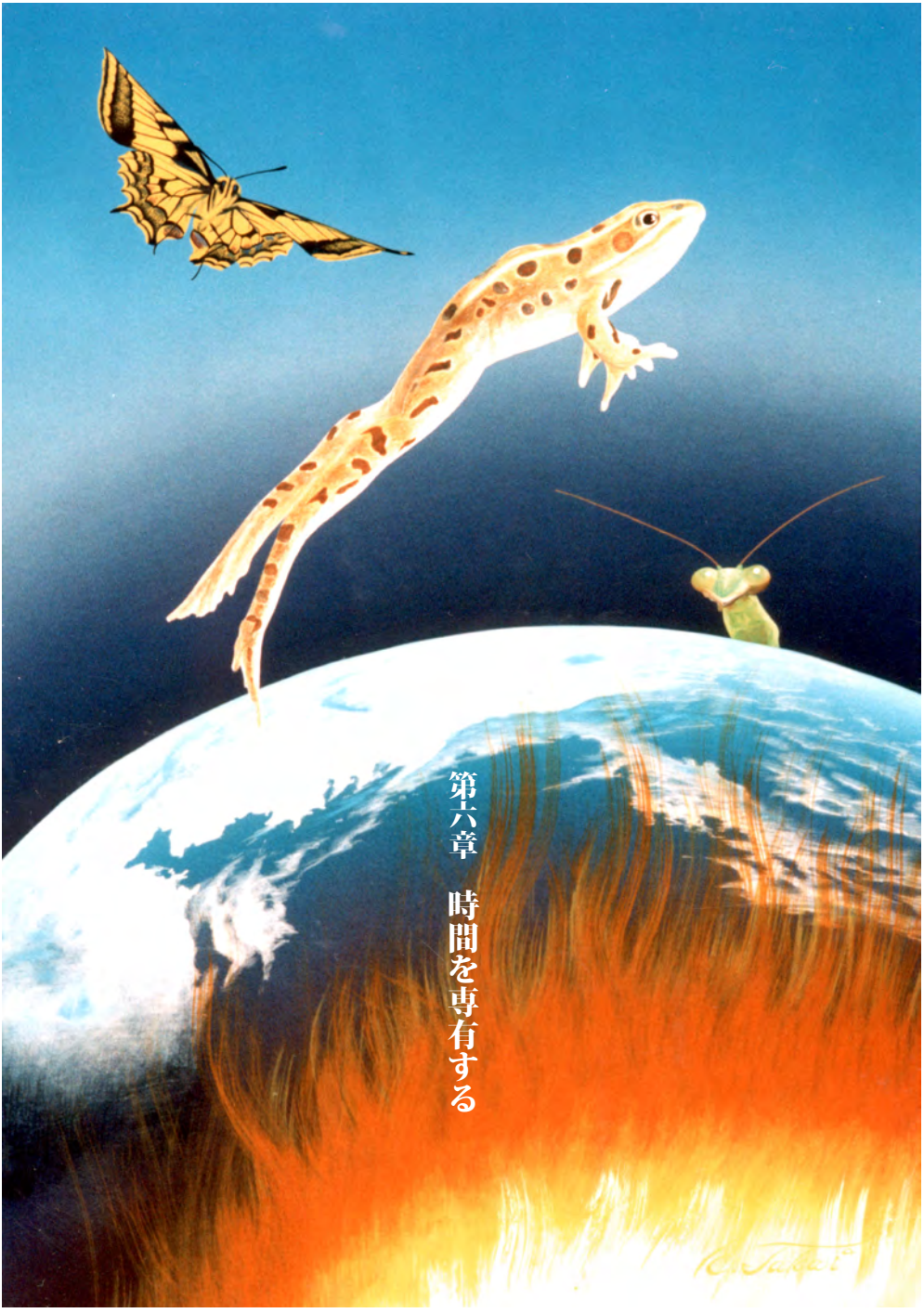
もっと不可思議なことは、健康は病気からしか考えられていない。病気からしか健康を見ていない。ズバリ健康そのものを考えている組織や人は稀有である。

人間は何故生まれるのか？役割や使命があるからではないのか？　意味のない命はない筈だから、生まれたからには、生かされているからには、そこに何らかの役割や使命が必ずある。ただ、それを感じず、気づかずに終わる人間も多い。現代はこれを看過する仕組になっている。

縄文人や世界の先住民は己の役割や使命を感じ気づくための仕組を持っていた。子供から大人になる過程で、間違えば死んでしまうような過酷とも思える試練があった。彼らは己の役割や使命を自覚してはじめて大人とみなされた。

健康はその役割や使命を果たすために不可欠だった。旬のものを、咀嚼して腹六分で食べ、生き物の命を体に取り込むことに無上の感謝をし、毎日生活の律として体を鍛え、自分のことより集落や村落における己の役割や使命を遂行した。そうするために健康でなければならなかった。使命を果たすための健康維持は縄文人の義務だった。

使命の遂行とは無関係な、ただ健康であるための生活をしているわれわれとは根本が違っている。



第六章　時間を専有する

地球時間

縄文人の時間は地球時間だったと思う。弥生以降から現代にいたるわれわれの時間は人間時間といえる。

地球時間は圧倒的に長い。例えば、ドングリなどの木の実は一年待たないと食べられない。鮭も一年に一度しか捕らえる機会はない。空気中の二酸化炭素を吸収して木が育ち、木が朽ちて地中で有機物となり、酸化されて再び二酸化炭素となる循環には数万年かかる。石灰岩などの無機的な二酸化炭素の循環には一〇〇万年以上かかる。鉄鉱床は何十億年という時間をかけてできる。

狩猟採集という生活は、このようなユッタリとした時間に身を委ねること

だった。縄文人はこの地球時間に合わせて生きていた。石炭や石油が何年かかってできるか考えてみればいい。何億年もかかってできたものをわずか一〇〇年もかからずに使い尽くしてしまうのが人間時間である。ある試算によると人間時間の速さは地球時間の一万倍だという。人間時間の一〇〇年は地球時間の一〇〇万年になる。

縄文人の寿命は三十歳前後だったが、現代人が十歳前後で失う直観像を終生持ち続けた。日の出とともに起き、日没と同時に寝て、一日に三時間ほどしか労働をしなかったが、あとの時間を芸術性にあふれた土器や土偶作りにあて、祈りにあてた。世界で最長の縄文文明は、何十代も遡る祖先と、何十代も先の未来世代をつなぐ魂の循環があればこそ存続したのだろう。「時は生命なり」とでもいうべきか？

地球の物質・エネルギーの循環サイクルは、人間の発明した科学によって

一万分の一の時間に短縮された。いま、人間時間が地球時間を凌駕し、人間システムが地球システムを凌駕している。地球の循環サイクルは人間の手で断ち切られている。これが自然破壊の本質だと思う。

自然の大いなる蓄積を一気に使い尽くし何も残さず、地球時間に沿って生きる殆どの生命だけでなく、人間時間を確立したかに見える人間までをも絶滅に追い込む。現代はそういう時代である。「時は金なり」の悲劇的結末とでもいうべきなのか？

固有時間

縄文人の一年間の生活歴は次のように推定されている（佐々木高明著「日本史誕生」）。

採集・狩猟・漁労―三～六月、八～十月
食品の貯蔵加工―三～七月、八～十月
交易―三～五月、八～十月
製作（手工芸）―六～八月、十一～二月
儀礼・余暇―六～九月、十一～二月

また、縄文人の一日の生活歴については、日の出とともに起き、日没と同時に寝たとされている。毎日、採集・狩猟・漁労や食べ物の貯蔵加工などに費やす労働時間は三～四時間で、あとの時間は製作や儀礼や創造的な生活に使ったといわれている。

自然の天候に従い晴労雨創の生活を送っていたものと思われる。時間は自然の流れそのものであり、常にユッタリと流れていた。

縄文人は一人一人が多様な生活時間を専有していた。労働に使う時間、夫婦と子供を単位とした家族とともに過ごす時間、集落やもっと大きな村落における共同体のための時間、そして自分自身のための時間、これらを日常的に個人が専有していた。自由に計画し、タップリ使うことができた。

現代人は固有の時間を持たず、労働に費やす時間が大半を占め、労働時間が他の生活時間を規定している。生活時間が労働に集中し、多様な生活を自由に計画したり、自分の時間をタップリ使ったりすることはできない。

多様な時間の専有が、多様な価値観を生んだ。縄文時代は一万年という長い時間軸のそれぞれの時期においてさまざまな価値観を育んでいる。また、同時期の地域による価値観の多様性も豊かだ。現代のように、国も地方も、企業も家庭も個人もが、「拝金主義」のようなひとつの価値観に従うようなことはなかった。縄文時代の悠久は一人一人の固有時間という時間意識がもたらす価値観の

多様性に負うものだろう。現代のような一極価値観の寿命は短い。一〇〇年ももたずに崩壊する。

体時間

現代のカレンダーは脳時間である。一年は十二ヶ月、三六五日、一月一日にはじまり十二月三十一日に終わる。続々と数字が並ぶだけで、数字に意味はない。脳が数字を意味もなく認識するだけである。

ところが、「二十四節気」というカレンダーもある。地球と太陽の角度によって宇宙が循環する節目をとらえている。体はこの宇宙のリズムに適応している。

春は、立春－雨水－啓蟄－春分－清明－穀雨
夏は、立夏－小満－芒種－夏至－小暑－大暑

秋は、立秋－処暑－白露－秋分－寒露－霜降
冬は、立冬－小雪－大雪－冬至－小寒－大寒

日照時間が最も長い日が夏至であり、最も短い日が冬至である。この日照時間の中間点が春分であり秋分である。縄文人は明らかにこの宇宙の運行リズムを知っていた。そればかりか、これにあわせて暮らしていた。体が適応するカレンダーをもっていた。まさに体時間である。

体時間は少なくとも江戸時代までは踏襲されていた。それはさまざまな文字に残されている。例えば、

「聖（ひじり）」という文字。日知りのことをいい、二十四節気の原理を知り尽くした人のことをいった。日知りは、木の芽がふくらむ季節である「木の芽時」に、神経痛を病む人が増えるなどということを言い当てた。

「暦（こよみ）」という文字。日読（こよ）みのことで、よみは数えるという意味なので、

重要な起点をみつけて数えることをさした。「野分き」などといい、九月が台風の季節であることを表現した。

体時間は自然を全体として観察することを求めた。だから、縄文人は初萩が鹿を呼ぶことを知っていた。雁の渡りが紅葉を誘うこともわかっていた。そして、満ち潮に人が生まれ、引き潮に人が死ぬなどともいった。縄文人は自然に沿い、自然のリズムで生活していた。

縄文人の仕事観

縄文人は一日に三時間ほどしか働かなかったという。植物採集や動物の狩猟や漁労、それらで得た食品の貯蔵や加工、住居や共同施設の建設など生命の維持に必要なことに従事するのは日に三時間という。

日の出とともに起き、日の入りとともに寝たというが、あとの時間は何をしていたのか？　多分、土器や土偶やさまざまなものの製作、祈りや儀礼、それに遊びが残りの時間を使って行われていたものと思われる。

縄文人は自然の動植物を採取して生命を紡いでいたわけで、食べ物をお金で買っていたわけではない。だから、お金を稼ぐ労働、つまり、賃労働はなかった。食べ物は自然に働きかけて手に入れた。生きるために自然に働きかけることが仕事であった。

製作や儀礼や遊びは仕事ではないのかといえば、これも仕事である。これらは、生きることを意味あるものにすることであるが、やはり仕事であった。そして、これも自然に働きかけることを通じて行われた。

縄文人にとって仕事とは自然に働きかけることを意味していた。食糧の獲得

に限らず、生活を豊かにすること、いわば文化的な活動も仕事であった。生活と仕事はひとつのものだった。現代のように、職場と家庭と地域と自分というように生活が分かれていたり、それぞれの領域で価値観が違っていたりはしなかった。みんなひとつのものだった。それはすべてが自然との交流によって成り立っていたからである。

現代の仕事観と比較するとよくわかる。現代の仕事は自分の労働力をお金に換えることである。お金のために働くのであって、お金で生活に必要なものを買う。そこには自然との交流など微塵もない。

山村で暮らす縄文人の末裔は、一九六〇年代頃までは仕事と稼ぎを分けていたという。仕事はそこに暮らす以上しなければ生活が崩れてしまうような行為だった。木を育て、山道を修理し、橋をかけ、畑で作物を育て、祭りを行うことだった。すべては主体的に行われた。稼ぎは賃労働、指示に従うだけで、主体性は

なく他人仕事ともいわれた。現代は他人仕事万能になってしまった。

挿絵作家の言葉

高井　一暢

私は、農家に生まれ少年時代から家族と農作業をすることで、自然と親しんできました。そして、少年の頃ひとり野山を歩きながらいつしか自然の神秘さに引き込まれてしまいました。

子供の私には、草むらの中で活動する虫たちの世界や、小川に生息する魚たちの世界や、森の中で根を張る植物たちの世界が、絶妙な調和を保ち相互依存し合い、成り立っている、このなんともいえない自然界の不思議な英知にただ驚くばかりでした。そうした相互依存し合いながら、ひたすら生きている小さな生きものたちの神秘な世界に、とても興味深く魅せられてしまいました。

私の作品に生きものたちが登場してくる理由は、こうした少年時代に出会ったさまざまな生きものたちの魂が、時空を越えて呼びかけてくれるような気がするからです。

私たちは、経済優先の政策のもとに農業から工業中心の社会に移り、すさまじい速さで国土の開発が進められ、大量生産、大量消費を続けた結果、便利さと発展を引き換えに、生きとし生けるものたちにとって大切な自然を次々と破壊してきました。

それは、人間たちの精神が少しずつ自然から離れていくことになってしまい、自然に沿う精神を忘れてきてしまった。そして、人の心を癒してくれる美しい自然や、緻密でかつ絶妙に絡み合う無数の生態系も奪ってきました。今も目先の慾に眩み、次々と自然が破壊されています。このまま進めば近い将来、私た

ちや私たちの子孫にもその付けが回ってくることでしょう。

かつて、私たちの祖先は、巧妙に自然と分かち合って生きてきた歴史があります。そこには、自然を支配しようといった傲慢な姿は見られず、むしろ自然と一体になった暮らしが成り立っていました。そして自然への畏敬の念を持ち、自然のもたらす恵みに感謝することを忘れませんでした。

今、私たちは、この祖先の偉大なる知恵に委ねるべきではないだろうか。

徳井豊
中垣剛典
中村敏行
並河靖枝
西川巌
西山昭
苗加仁之
野沢一美
野仲弘志
野村武
萩原健治郎
橋本学
長谷川恵津子
初田一
早川伸吉
原田常雄
平川進
平野智照
平松克一
福島丞
福田敏子
藤沢隆博
藤山渥
藤原康之

法橋史彦
本田達広
前田喜代和
松澤節子
松平雅之
松平三千代
松永豊
松永奈美子
松吉菊美
丸山尚
水井元洪
水野久作
三角浩史
満仲雄二
三村夫美

宮城県加美郡
中新田町図書館
三宅久二子
三宅廣明
宮地瑞恵
森孝之
森千司穂
守下昌輝
森島秀樹

森本由美
矢島恒子
山崎日出男
山田敬二
山本禎二
横井武志
吉田壽幸
四木信
米沢美代子
米澤鐵志
米山秀男
若尾隆一

「縄文魂」の出版にご協力いただいた方々

青山隆一
赤井睦美
赤堀定男
赤松民男
阿久根昌夫
足立利喜雄
鋳方貞元
池上澄夫
池田寿亘
石松重隆
伊藤和夫
伊藤利彦
井上鈴子
今井崇
今村哲夫
上畑拓男
大里欣弥
大里勝蔵
大隅泰一
大隅健治
岡本常男
小川文雄
奥出實
尾島信行

小幡昭三
小原健吾
加島義正
片山登
加藤義海
加藤弘
亀井則之
川井茂
河野耕一
神田久雄
喜多研二
木下二二男
京谷信弥
九鬼昌子
倉光弘己
黒田克子
小坂郁夫
小西高明
小林純生
小村幸治
小山久生
近藤隆一
佐々木興業㈱
佐藤縫子

佐藤競
佐藤健雄
塩見玲子
塩山博之
柴田光榮
嶋崎真二
島純三
清水義晴
下荒地勝治
下橋義博
菅野芳樹
鈴木良法
関泰昌
高井一暢
高島純子
竹内洪
竹内正三
竹山鐘大
田中康之
田中淳介
津田勝義
露の団四郎
寺井秀藏
寺尾久継

佐藤眞生（サトウマオ）

1939 年朝鮮生まれ。
マオリ族に心酔する父がマオと命名。釜山から貨物船で舞鶴へ上陸、新潟へ帰還。サツマイモの蔓を食べて育つ。
中高時代、柔道とテニスと山岳に没頭。山で先輩の遭難死に触れ、禁断の枯れ沢にテントを張り鉄砲水の遭難を体験、それでも山岳競技で国体に参加。
中学 3 年、末川博先生の“自由な私学”のラジオ講話を聞き立命館大学を専願。学生運動に没頭、“就職がないなら自分で職場を作れ”という末川博先生の助言でマーケティングの調査・企画・計画推進の最前線に身をおく。
1983 年に有限会社コムニスを設立。事業コンセプトは、精通者に教えを乞う調査、最初に最後を考える企画、成功するまでやり遂げる実践。
得意で共鳴する異業種交流、縄文魂に立ち返る自然維持活動、未来世代に誇れるまちをつなぐ市民活動を主宰。
567-0832 茨木市白川 2-22-6
TEL:0726-36-0393　FAX:0726-36-0394

縄文魂　文明にすがる人間は救済する価値もない

2002 年　1 月 31 日　紙版発行
2010 年 12 月 10 日　電子出版発行

著　者 —— 佐藤眞生
発行者 —— 桐生敏明

紙版発行 —— 株式会社 かんぽう
電子出版 —— 編集工房 ＤＥＰ　0745-60-2696

©2002 Printed in Japan
ISBN4-900277-10-X